

1998.1

# 岡村昭彦の会

NO.7



## '97「夏季特別セミナー」報告

●いま、新聞報道はどうなっているのか…2

フリージャーナリスト 玉木 明

●教育者としてのAKIHIKO…11

批評家 米沢 慧

●コンピュータから見た人間の脳…24

紀行作家 本田成親

# いま、新聞報道は どうなっているの か

玉木 明

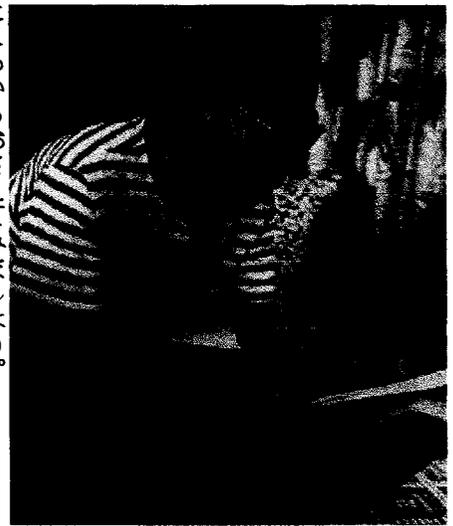
(たまたきあきら・フリージャーナリスト)

1

「いま、新聞報道はどうなっているのか」という仰々しいタイトルなんですけども、このところちょっとマスメディアの問題というのが、大変重要になってきているような気がしますので、きょうは新聞を中心にしたマスメディアのあり方についてお話してみようと思います。

日本の場合は、新聞がメディアの基本的なあり方を決定してきたという歴史的な背景もありますので、とりあえず新聞の問題を基本的に考えて、いまのメディアの状況を理解するひとつの考え方を話したいと思います。

基本的にニュースのあり方の問題なんですけど、このニュースというのは一体どういう性格を持っているものなのかという、基本的な



ところからおさえてみましょう。

これはわたしが言ったことではなくて、アルフレッド・シュツツという現象学的社会学者といったらいいのか、そういう人なんですけど、僕はニュースを考えるときに、基本的にその人の考え方に依拠して考えてきます。

その人の考え方というのはいわゆる日常生活、生活世界とかいう言われ方をしているんですが、これは自明性の世界と考えればわかりやすいでしょう。たとえばよくニュースを規定するとき、「犬が人を噛んでもニュースにはならないけれども、人が犬を噛んだらニュースになる」という言い方があります。

犬が人を噛むというのは当たり前なこと、ありふれたことなんですけど、逆に人が犬を噛むとニュースになるということです。そう

いう意味で言えば自明性、要するに当り前なことがひとつ背景にあつて、その世界から逸脱したものがニュースであるという捉え方を一般的にすると思うんです。

太陽が地球を回っているというのはガリレオ以前だったら自明性の世界だったのですが、ガリレオが「地球が太陽のまわりを回っている」と言ったときには、これは相当なスキャンダルな話で、それはやっぱりニュースになる。要するに自明性の世界から逸脱したものがニュースであるという、そういう考え方をしたら非常によく解ると思うんです。

その自明性の世界というのがいわゆるニュースの背景と考えると、そこから逸脱して飛び出て、印付きになったものがニュースであると、そういう考え方になります。

これを僕は言葉の問題に置き直して考えてみたんです。そうすると、自明性の世界というのは、いわゆるわれわれの世界だということになります。一人称複数。その逸脱したものは、われわれの世界に属さない部分というのは、これはどうしてもわたしの世界、一人称単数。言葉の問題で置き直すとそういう格好になる。

たとえば太陽が地球のまわりを回っているというのが自明性の世界だとすると、ガリレオは「私はそうは思わない」と言ったわけで、どうしたって「私は」という言葉を使わざるを得ない。そういう文脈でないと、そのことが言えないという形になります。

ところがわれわれの世界というのは、たとえ「われわれは地球が太陽のまわりを回っている」と考える」というような言い方をしません。あるいは「われわれは1+1=2であると考える」というような言い方はしません。一般的に誰が考えても疑問の余地がないような場合は、「われわれは考える」という文脈が落ちて、「太陽が地球の周りを回っている」、「1+1=2である」という言い方をするわけなんです。

エジソンみたいに「1+1は何で2なの」という疑問を持つ人は、「私は1+1=2である」ということがわからない」という言い方になる。「私は」という一人称を設定しないとそういう言い方はできない。言葉の問題ではそういう不自由さがあるんです。

これをニュースの問題に置き直すと、無署名記事というのはどうしても「われわれは」というのが前提になるわけです。そうすると自明性の世界、当たり前の世界が必ず前提とされているということになります。ここが一番問題と私は考えるんです。常に「われわれは」という文脈で、自明性の世界がいつも前提にされているというのが無署名記事の大きな特徴だろうと思います。

この無署名記事というのは、自明性の世界というのが非常につきりしている場合、確固たるそういう枠組みがあるときは、意外と効果的に作用すると思うんです。ところが最近これが崩れてきている。「われわれが」と

いう自明性の世界、だれが考えてもそう考えらるだろうという世界がだんだん怪しくなってきた。その辺の問題が新聞とかマスメディアが何かおかしいのではないかという問題と密接に結びついている。そういう状況的な要素もあると思います。

「われわれが」というのをいつも前提にしている記事のスタイル、これは言葉の問題が先なのか、それとも新聞の問題が先なのか、そのところは私もちよつとはつきりしないのですが、戦後、新聞が再発足する時にアメリカから入ってきたそういう考え方を、ここでシステム化したというところが一番の問題点だろうと思います。

そうすると「われわれの」自明性の世界と、そうでない世界がここではつきりと区別されてくる。いつも自明性の世界とそうでないもの、われわれに属する世界とわれわれに属さない世界というのがつきり区分されてくるという、基本的にそういう構造をもってくるわけです。ここところがやはり一番問題と考えていいと思います。

## 2

これは抽象的にいくら言ってもなかなかつきりしないので、具体的な新聞記事の例で見た方がいいと思います。

資料の1が署名記事の事例ですけども、これは毎日新聞のスクープで、大変大きな記事

です。当時、私もかなり注目した記事なんです。今年の1月6日の記事ですけど、いま話題を集めている安楽死の問題を扱った記事で、これが朝刊のトップ記事に出ています。普通こういう記事がトップになることはありません。社会面のトップになるのはよくあることですが、1面のトップというのはまずありません。だいたいここは日本の政治、「総理がどうしたこうした」とか、あるいは国際社会の問題とかが1面にくるんですけど、毎日新聞はこれを、一番最初の1面のトップに持ってきています。

最近どの新聞もみんな同じような記事になるというので、とにかく横並びの記事をやめよう、そういう新聞の作りをやめよう、さら

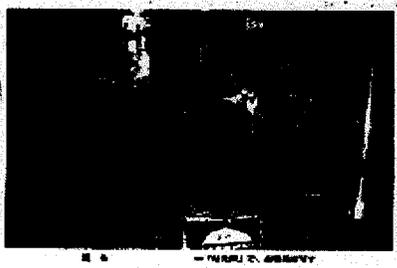
97.1.6 毎日新聞

### 「牛かす」のがつらい

「あしたの風」

## 迷路の中の「8カ月」

### 植物状態 83歳の安楽死中断死



には一報主義をやめよう、脱皮しようというのが毎日のひとつの方向だろうと思います。

これは毎日のスクープ記事なんですが、とにかくスクープを一番トップに持つてこようという意向があつて、こういうやり方をしていふのだと思います。ところが、週刊文春がこれを叩いたので、最近またおとなしくなつてしまつた。もうちよつと続けてやつてもらいたいと思うんだけど、最近こういうやり方を見なくなつて残念な気もするんです。

このトップ記事は無署名です。第2社会面にこれが出ている。同じ朝刊でこれが第2社会面で、資料にあげたのが社会面のトップ記事なんです。非常に大きな扱いの記事だったので、これが非常に話題になりまして、大きな反響を呼びましたが、1面、第2社会面だけだとやはり無署名の記事です。資料にあげたのが署名記事です。

先ほどの自明性の世界からみると安楽死といふのは、いまの状況から言うと、殺人でないかといふ考え方が一般的にいうとあると思うんです。

具体的にいうと八三歳のおばあさんが特別養護老人ホームに入院していて、植物状態になつていて。人工栄養をずっと続けてきたが、足が壊死してきて部屋中に悪臭が漂い、物凄く悲惨な状況になつてきた。

このまま延命治療を続けて生かし続けるのがよいかどうか、ということが問題になつてくる。身寄りのないおばあちゃんだけ

ど、ただ若い時期から同居同然にしてきた、血の繋がりは無いが、いわゆる親子関係みたいな感じの男性が一人いて、その人から「もう、これでやめてください」と医師のところ申し入れがあつたんです。

それで特別養護老人ホームでは担当者、院長はじめ医師、介護をやつている看護婦さんとかが集まつて「どうしようか」という検討をして、「人工栄養だけはやめよう」ということで決定した。もちろん水分・呼吸とかそういうものはずっと続けているんだけど、人工栄養だけ止めて、その後何日かして死亡したという記事なんです。

毎日新聞のこの記事、署名記事はこの人がおそらく取材して、この人がスクープした記事なんです。この資料1の一番最初の文章を見てください。『栄養を中断しました』医師がそう語つた時私の脳裏を一瞬『殺人』という言葉ががすめた』とあります。一般的に考えるとそういう受け止め方をすると僕なんかも思うんですけど、ところが一番最後のパラグラフは「私はこれまで安楽死は人権侵害だと思つてきた。ところが彼女の周辺は『尊厳ある死』を選んだと信じている。私は迷路に入り込んだように答えを見つけないでいる」といふふうな結んであります。

この記事がいわゆる自明性、安楽死＝殺人といふ考え方に對して、「私は迷路に入り込んでいる」といふ疑問を呈しているわけです。「答えを見つけないでいる」と取材記者

の「私は」の文章でその自明性に対して疑問を提示しているといふ記事なんです。

毎日がこれだけ大きく扱つたものだから、各紙ともその日の夕刊、1月6日の夕刊で追っかけ記事を載せました。朝日の記事を資料にあげてありますが、これは無署名記事です。

といふことは、自明性の世界を必ず前提にしないと記事が書けない。「われわれは」といふところに依拠しないでは記事が書けない。そうするところという記事になる。下から2段目のところの「京都府警は」というところがありますが、「京都府警は、栄養の投与中止が殺意にあたるかは微妙として静観の構え。親族らからの告訴があつた場合は捜査することもあり得るとしている」といふ京都府警の見解をここで紹介している。

次に弁護士のコメントが載つていふんですが、「栄養投与は介護義務」といふこの論調からいうと、これは明らかに安楽死＝殺人といふ、一般的に考えた既存の論理といふか、誰でもが考える一般的な考え方のところに立つた記事になつていふ。これは後追い記事だからこの程度で済んでいふすけど、もしこの朝日の記事がスクープであつたならば、こんなことでは済まなかつたと思ひます。

もし仮に、僕が自分で掴んだ記事だつたら、この特別養護老人ホームに老人を入れている他の家族の誰かに取材して、必ずそのコメントをとる。「あなたのおばあちゃんが入つていふるあそこの老人ホームはちよつとひどい



ではないの。こんなふうにして栄養も与えないで死んでしまったのよ。これは殺人でないの。そんなところへあなたの親族を入れておいていいのか「みたいな格好で取材をかければ、「これは大変なことだ」「これはなんとかしなくてはいいかん」みたいな話をしますよ。

それをこの記事の後ろに親族のコメントとして加えた場合には、これは当然社会面のトップ記事になるわけで、朝日のスクープとして大きく扱った記事になるだろう。もし第一報がこの朝日の記事であったなら、次に追っかける新聞はこれに輪をかけた格好で記事を書くことになる。そうなることは大きな社

会問題になりかねない。この特養老人ホームにわつと人が押しかけるとか、あるいはピラが配られるとか、そういう動きが出てこないとも限らないケースだと思っただけです。

いまのところ、日本の場合には安楽死が公認されていないわけですから、この署名記事と無署名記事の違いというのは、かなり大きいはずで

たまたまこの場合は同じ事件を署名記事と無署名記事で比較できるんですけど、今までこういうケースがめつたにないもので、これは顕著な例として注目したんです。

こうやって二つ比べてみると記事の成り立ち具合がかなり違う。毎日の記事の場合は「私は」で書いてあるわけで、そうすると安楽死殺人という一般通念に対して、「私は答えを見つけ出せないでいる」という、そういう文脈の記事も書ける。これは読者に対して「みなさんどう考えますか」というひとつの問いかけです。問題提起の記事であって、けっして断罪記事になっていない。

無署名記事になると自明性の世界に依拠して、そこから逸脱した行為に対して、非常に断罪的な論調を取らざるをえない。それが無署名記事の大きな問題なのです。そういうふうにと考えると、この二つの記事は、署名記事と無署名記事の違いがよく理解できると思います。

ついでにいいますと、朝日の記事にかぎらず、各紙全部だいたい同じようなニュアンス

の記事でした。僕も関心もって、ずつとコピーをとって検討してみたんですが、だいたい同じような無署名記事でした。無署名記事というのは、だいたいこういう形で成り立つ。

それに対して署名記事が毎日新聞の例です。問題にならないで終わったのも、署名記事が最初に出たということが大きいと思います。第一報が署名記事で、問題提起のスタイルで報道されたもので、あといくら追っかけても、もう意味をなさない。これをいくら殺人だと騒いでみても、先に毎日が大きく報道しているもんだから、そんなにいい方もないだろうと、これはこのまま終りになったというケースなんです。

これが逆だったら、どうなっていたかちょっとわからなかったなという感じがするんです。京都のほうの病院でありましたよね。あのケースなんかも考えると、まだまだ日本は安楽死の問題が、そう単純には自明性の世界に落ち着いた格好にはなっていないだろうというふうに見えると思うんです。そういう意味でこれは署名記事が無署名記事の断罪報道に対してかなり抑止的に作用したひとつのケースだというふうに見えると思います。

### 3

署名記事ということ、これに関連して言いますと、毎日のこの連載記事は今までちょっと類のない署名記事のスタイルをとって

て、「ハエー」と思うところがあります。ここまで新聞記事が変わってきたかというひとつの事例として紹介しておきたいと思つて資料にあげたんですけど、どれひとつ取つて見ても、文章が実にいいんです。資料の4を見ていただきたいんですが、これは「手のひらの糧」という「長命社会を生きる」の第3部に入つている、一つの記事なんです。

これは人の保証人になつてハンコを押したために、ずいぶん借金取りに追いかけられて、離婚もして、一人でいるという、そういう人生が狂つてしまつた一人の男の話が書いてあるんです。

なかなかおもしろい文章だなと思つたのは、一番最後のあたりを見ればわかる。高島炭鉱で働いていた人の話ですけど、「その炭鉱が私の故郷だと教えた」という文章があります。「私は」というのはこの記事を書いた記者です。「私はその炭鉱が自分の故郷だと教えた。村田さんの表情がなごんだ」こういう文章、記事というのは今まであまりない。「私は」の文脈は、自分の個人的なこと、出身地の話まで盛り込む新聞記事というのは、これまでなかったです。

しかも記者の年齢が入つている。これは長命社会における生死観の問題で、生きる死ぬの問題だから、年齢によつて考え方が違うということがある。三七歳なら三七歳の考え方をするだろうという意味で、年齢を入れていくんでしょけども、年齢を入れた記事なん

て今までなかったです。

毎日新聞もこれが初めてだと思ふんです。それで一番最後は「新しい人生に乾杯」というふうに結んであるでしょう。こんな文章、手紙の文章ならわかるけど、記事の中にこういうスタイルの文章を書き込むということはまずあり得なかつたことです。

この連載はかなりの数の記者達を書いてたわけで、そのうちに「この記者なかなか文章がおもしろい」とか、「この記者はこういうことに関心を持つている人だなあ」とか、ずっと続けて読んでいると非常によく分かつて、個々の記者の特色というか、文章の味、いわゆる文体が出てきているというふうにいえると思います。新聞記事の中でも、そういうことが感じられるような記事になつてきたということ、記事の新しい方向を示しているというふうに、これを見たんです。

同じこういう新聞記事で、従来ならば多分資料の3のような文章になると思います。

これは朝日の典型的な無署名の記事で、しかもテーマも同じです。同じテーマを署名で書くところなるし、無署名で書くところな記事になるという、ひとつの典型的な例です。

昔は朝日のこういう記事がいわゆる名文といわれていた記事なんです。ところが毎日の記事と比べて読むと、「なんて古めかしい記事だろう」ということが、一目瞭然わかると思ふんです。一番最後の文章では、「陽一さんは揺れている」という言い方しています。

記者が揺れているのではなくて陽一さんが揺れているんです。陽一さんの心が揺れているわけで、「何故あなたに分かるの」というふうになる。ちよつと理屈っぽく言えば、何で他人の心の内まで分かるのというふうになりますよね。「陽一さんは『私は心が動揺しています』といった」といった書き方なら分かるけど、「陽一さんは揺れている」、こういう書き方、要するに取材対象に対して添い寝する文体なんです。「私は」と書けないわけですから、無署名の記事の場合には必ずこういう文体にならざるを得ない。

これは一種の小説の文章にも非常に近いわけです。距離が取れなくなつてしまうと、取材対象の気持ちの中に自分を添わせていくという格好でしか記事が書けなくなる。こういうスタイルの記事が、旧来名文といわれていた。いい文章のスタイルというのは、これ読んでもらつと、だいたいこんなもんだというのがよく分かると思います。

何かちよつと押しつけがましいというか、何となくこういう文章書きたくないなあという思いがあるんです。駆け出しの頃というのはこういうのを見ながら、手本にして一生懸命こう書くんだというふうに、僕なんかも練習した経験があります。

ところがこれがやっぱり、どうしてもおかしいというふうに思えて、ここまでいかなかつた、長い間これがうまく書けなかつたというのがありました。そういうことから言つと、

毎日の署名記事の例文は全く抵抗なく読める。それだけやっぱり違ってきているという感じがします。

毎日は署名記事にしてまだ一年ちよつと、それくらいでこれだけ文章が変わってきているんですね。そのところだけは署名記事化に踏み切った一つの大きな成果だろうなという気がします。文章の迫力という点でも違し、文章の味わいの質の違いもあるし、その点が非常に新しく感じられる部分だろうと思います。

それでこの「長命社会を生きる」の第1部が掲載され始めて、翌日からじゃんじゃんとならばFAXが入ったり、電話がかかってきたり、物凄い反響がきたというんです。ひとつは、もちろん安楽死とか老人問題、そういうテーマの問題もあつたんだらうけど、もうひとつはやっぱりこの文章ですね。記者達が自分の問題として老人問題を考えて、自分の肉声で語り始めたというところがよかったです。文章の迫力が、全然違つていたという感じがします。

同じ時期に朝日がやった「いのち長き時代に」は、テーマも同じなんですけど、朝日に寄せられたFAXとか、手紙の数をくらべると、毎日の方が、三倍多かったというふうなデータ的に出てくるんです。

僅か一カ月ぐらいの間に段ボール三つもの手紙が寄せられた。その数一五〇〇通。一五〇〇通といえはかなりのものです。五〇代のベテランの記者が「これまで長い間新聞記者をやつてきたが、こんな反響が多きしたのは初めてだった」と言つていたから、かなりの反響があつたということだと思ふんです。

記者が自分も裸になつて、自分の肉声で読者に訴えかけている。その声をやっぱり読者にも同じような気持ちを取り立てて、手紙を書かざるを得ないような気分させたという、そういうことだつたんだらうと思ひます。やっぱり署名記事だから、そこまで読む人の気持ちを持て文章力、迫真力を持てた。

それに比べて朝日のような無署名記事だと、どうしても他人事なんです。どこまでいっても記者の肉声は出せないし、「私は」という文脈を持ってないわけだから、記者の気持ちは出てこない、私はそういうふうな判断するんです。もしこの辺を、もうちよつと詳しく見たいという人がおられれば、毎日から『長命社会を生きる』というタイトルで本になつて出ていますので、読んでもらえばよく分かるかと思ひます。

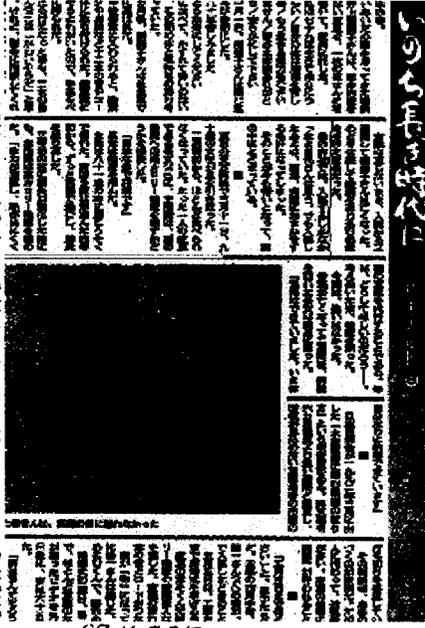
4  
僕はとりあえず署名記事がいま大事になつてきているという立場で、ずっと署名記事と無署名記事の問題を追つかけてきているんですが、この署名記事化というものが、何故いまだ大きな問題として出てきているのかということ、別の面から理由づけしてみたいと思ひます。

「ちよつとこれおかしいな」という感じが非常に顕著に示したのが五五年度体制の崩壊のころからだと思ふんです。無署名記事、自明性の世界を前提にしている無署名の記事があまり抵抗なく読めるというためには、はっきりとした世の中の枠組みというのがかなり固定していなければならぬ。

誰が考えても「このところは揺るがないよ」というところがはつきりしている時代には、まだ無署名の記事でもそんなに違和感なく読めたと思ふんです。五五年度体制の崩壊とともに、これが揺らぎ出してきた。自明性の世界が揺らぎ出してくると、やっぱり読む人にもそれなりの抵抗感が出てくるというようなどころが、かなり無意識の内でもあつたんだらうと思ふんです。

五五年度体制の時代というのは、たとえば読売新聞、産経新聞なんかはいわゆる保守的な色彩の強い記事をしつとやつてきました。

自明性の世界をどこに置かかという前提の部分で、かなり保守的な部分、いわゆる自



97.4.15日

党寄りの部分を設定していた。もちろん読売の中でも革新的な記者もいれば、いろいろいるわけだけど、「うちの新聞はこれを前提にしましょう」というふうになれば、全部そういうふうになります。無署名の記事だからそういうふうになります。

私は全然、皇室を擁護する気はないけれど、「紀子さま」と書きます。「雅子さま」と書きますよ。無署名の場合はそれはそうなるんです。それが書けないとなったらばやめるしかないわけですよ。

朝日の記者だって自民党支持者がいっぱいいるだろうし、黨員もいる。何も左翼の人達ばかりでないわけで、その辺は無署名性だからどうにでもなれるというところがある。

ただ何を自明性の前提にするかで、記事の色合いが違ってくる。朝日は朝日なりの、いわゆるちよつと革新系の、そういうニューアンスの強いところを、われわれの視点にしようというふうにして、ずつとそういう形態でやってきた。それが五五年体制の場合ずつとづいてきたわけです。

ところがこれが崩壊すると、保守革新というひとつのはっきりした枠組みが崩れるわけで、崩れていながらやっぱ長い間やってきたものだから、その枠組みというものはなかなか崩せない。崩れながら崩れてない部分みたいなものもあるし、崩れている部分も当然あるわけですけど、それが何かひとつの流れの中で微妙な形で揺れ動いている。

もちろん保守革新というのは消えて無くなったわけで、社会党寄りの記事を書こうとすると社会党はどこに行つたか分からない。そういう関係の中で、われわれの世界、自明性の世界をどこに見つけ出して書くかというのが、無署名記事の場合は、重要な問題になってくるわけです。どこに自明性の立場をみつけ、自分が依拠していくのか。そういう問題が大きく浮上してきたんです。

5

安楽死の問題でもそうですけど、これを殺人だというふうに言えるのなら、そこに依拠すればいい。どの新聞もそこに行くけれども、毎日新聞のように、「これはたして殺人かどうか私には答えが見いだせない」という、こういう微妙な問題ばかりいま表に出てきているわけです。どつちにも態度をとれないみたいな問題がいっぱいあるときに、われわれの自明性の世界をどこに見つけるかは非常に難しい。そういう時代になってきたというこ

とだろうと思うんです。

それで言いますと、昔の五五年体制の保守革新みたいな、二大対立関係の尾を引きながら、あるいは崩れながらやってきている大勢が、問題によってどこへ流れて行くか、いまちよつと見当がつかない状況があります。

たとえば従軍慰安婦問題というのがありますが、これを巡って自虐史観と教科書問題、いろいろ問題が出てきています。自虐史観というのは、朝日新聞あたりがまだ昔の革新系の色合いをずつと色濃く残していて、戦争中朝鮮や中国でひどいことをやってきたという記事をずつと、延々とやってきたわけで、本多勝一なんかその典型だけれども、徹底的にやってきた。

そういうのを保守系の知識人達は自虐史観という言い方で批判してきました。彼らは従軍慰安婦の問題を中学校や高校の教科書に載せてもらつては困るといつています。

陸軍、軍部がそういうことを強制的にやつたという事実が確認できないのに、あたかも確認できたかのごとく、史実であるかのごとく教科書に載つるのはけしからんという言い方で批判します。

この問題はやっぱり、五五年体制の保守革新の対立構造をかなり色濃く残した、ひとつの対立の図式の中で見いだされてくる問題だろうと思うんです。この対立の構図は朝日が戦後ずつとやり続けてきた日本の歴史批判、外国に対してとんでもないことをやってきた

んだという、その批判のキャンペーンの流れの中にいる潮流と、何で日本人でありながら日本の歴史、日本の国をそんなに悪く言うのかと、とんでもない、という対立構造の反映なんです。

もはや朝日、読売なんていう対立の構造はなくなっていますけど、依然としてその構図は残っていると言うことなんです。どっちの言い方もおかしいではないかというのは、マスコミのなかには登場できない、出てこない。マスコミが誰もそういう識者にコメントを貰おうなんて思わない。立場がはっきりしたもののしか出てこない。論者もどっちかの役割を引き受けて、どっちかの立場で発言するという流れが、非常に最近色濃く出てきているということだろうと思います。

それから淳君の殺害事件でも、おなじような図式がみられます。いわゆる人権擁護派と呼ばれる人達、『フォーカス』に対して「写真を載せるなんてとんでもないじゃないか」という流れには、これも朝日系の人権擁護の知識人たちが加わっています。

朝日はフォーカスに対して「とんでもない」と、社説で非常に怒っていましたけれども、そういう批判のひとつの流れがあります。

もうひとつは「フォーカスが何で悪いんだ」、「悪いことやった奴を悪いと言って、どこが悪い」、「親の顔も見てみたい」というようなひとつの論調も出てきている。

この対立の構図というのは、やはり人権擁

護派と、それに対する反発という形で出てきている。やっぱり二項対立みたいな要素というのが非常にあって、「どっちの論調もおかしいではないか」という立場が、やっぱりマスコミの上には出てこないんです。

米沢さんなんかは「どっちもよくない。どっちも負担してはだめだ」という言い方ですけど、だから米沢さんみたいなことを言っている人のところには、メディアはコメントを求めないことになるんです。やっぱりそうだと思います。どっちかはつきりしている人が、マスコミの前にやっぱり出ます。その対立の構造の中に問題の本質があるのならばそれでいいんだけど、本質は別のところにあると思うんです。表には対立の構図としてしか出てこない。何か対立の構図だけが非常に前面に出てくるということなんです。

それともうひとつ一番顕著だったのは、オーム・サリン事件のときの市民社会VSオーム教団という対立の構図でした。このところで特徴的だったのは、市民という言葉が非常に前面に出てきたことです。それがこの対立のときの問題だった。これは朝日・読売の対立の構図ではなくて、みんな市民だという図式でした。

だから市民主義というか、市民擁護の声が圧倒的だった。そしてオーム断罪一色になった。象徴的だったのは日本女子大の島田という先生でしたか、オームを擁護するというかそんな感じ、擁護しているわけではないんで

すよね、ただ気のいい先生でちよつと迂闊に、ああいう発言をしたために大学をやめざるを得なくなってしまったということなんです。

それに市民社会を守るためには、オーム教団の信者達を片っ端から逮捕しても構わないんだという論調が非常に強く出ました。考えてみれば、ホテルに偽名を使って宿泊しただけで私文書偽造で逮捕されたというのはひどい。そういう構図が出てきて、われわれの物書きの仲間でも、市民社会を守るためには、ここところは多少無理があっても、それはしょうがないという人もいた。容認派の人達が圧倒的に多くなってきたということがあります。

だけど一方で法律論というのがあるわけで、法律の前では誰も平等だ、万人は平等だという不文律がある。単に私文書偽造、ホテルでちよつと偽名で泊まったぐらいで逮捕される。こういうことがあつてはやっぱりまずい。こういうのを容認しちゃうというのが出てきてしまったというのは、マスコミが一挙に、われわれ探しに走ったということなんです。われわれをどこに位置づけるか、自明性の世界をどこに求めるかということで、わあつと、そっちに移動してしまう流れだと思うんです。

無署名記事の場合は、自明性の世界をどこかに置かないと記事が書けないという問題がある。市民社会を守るといふ観点に立てば、誰からも文句を言われない記事になる。それ

ばっかりが表に出てきたんですね。

吉本ばななのお父さんの吉本隆明さんが、「麻原彰晃を私は高く評価します」と発言したら、一気にわあつときたわけでしょう。「ばななが殺されたら、あなたはと思うんだ」みたいな、脅迫まがいの言われ方もしたりしたわけですよ。それならば麻原を死刑にして、全てけりが付くかというところ、そうもいかないという問題がやっぱりあるわけですよ。けどそういうことを言っただけでも、わあつと叩かれるという状況が出てきて、これは非常に怖い状況だなあという感じがしたんです。

誰でも反対できないものが前面に出てくるというのが、今後もやっぱりあり得るといえるのも感じる。サンゴ落書き事件のとき自然保護・環境保護が前面にできましたけど、自然保護に対して誰も反対はできない。あの落書きしたカメラマンは懲戒免職です。社会的に抹殺されたわけで、殺人的ですよ。

だからお犬様の時代とどこが違うかという感じさえる。一年もしないうちにサンゴはきれいに再生しているわけでしょう。首をちよん切られた人は今DPF屋さんか何かやっているといつていたけど、そういう感じになつて、抹殺されてしまう。どこかおかしいという感じが出てきています。

6

こういう動きに歯止めをかける手立てはな

いかと思うんですが、もしあるとすれば、自分で記事を書く立場で考えて、もう無署名記事でなくて署名記事しか、ちよつと手立てがないんではないかなという感じがする。

ただこれは署名記事の問題だけではかたづけられない。全て署名記事にしたらこういう問題がなくなるかというところ、やっぱりそうもいかない。ここまでメディアが発達してきている状況になると、新聞だけの問題ではなくテレビの問題もやっぱりあるわけですよ。相互作用というのか相乗作用というのか、これはちよつと、物凄い勢いで広がってきているわけですよ。どこにどう歯止めをかけていくかというのが大変難しい時代になってきたなあという感じがします。

それと僕はこれで週刊誌の記者から身を引いたということがあって、丁度いい時期に身を引いたなと思つているところがあります。

無署名の記事でいま記事を書くのがあまりにもうとましくなつたというところ、つまり見え見えの自明性の世界に、自分を仮託しなければいけなくなつたということがあって、もうちよつとこのへんが身の引き所だなあという感じが非常に強くなりました。いくらなんでも「麻原を死刑にしろ」みたいな記事はちよつと書ききれないなあという感じがあります。それで「この辺が身の引きどころだなあ」というふうな思つたんですけれど、今後はやっぱりわれわれ探しが、どこにどう動いて行くのか、これだけはちよつと気を付けて見てい

きたいなあというふうな思っています。

何が出てくるかちよつと今のところ分らないんです。五五年体制みたいな、ああいう対立構図がはつきりしている形で動くとは限らない。何か新しいものがどつと出てきたときに、全てがそつちに並び構図が、やっぱりどこかにあり得るような気がして、そのところだけは、よほど気をつけないといけない。

もしそういう状況に釘が刺せる、歯止めをかけられるとするならば、いまメディアの中では新聞しかないんじゃないかなというふうな僕には思っています。

だから新聞が変わつていかないと、全体のメディアというのはちよつと変わり様がない。新聞がジャーナリズムの原形をなしているわけで、新聞に頑張つてほしいという思いが非常に強い。だから毎日がこの一年間あまりやつてきたのを見てきて、ここまで記事が変わつてきたかということが確認できたことで少しは望みがもてる。

もう一方で、われわれ探しがどこに行き着くかというところは、やっぱり非常に注目して見ておいたほうがいいんじゃないかなというふうな思っています。

いづれにしても、「いまメディアが非常に危うくなつてきているなあ」というのが正直な実感です。新聞の報道については、だいたいのそんな感じを持っているということで、今日の話はこれくらいで終わります。

【体験的岡村昭彦論】

# 教育者としてのAKIHIKO

―「世界が見えるように、時代は手にとれるように」

米沢 慧 (よねざわけい・批評家)

1

今日のタイトルは「岡村昭彦の方法と世界認識」ということになっています。これまで岡村昭彦については、原則として著作について触れることにはしてきました。しかし今日は、岡村昭彦をよくご存じな方がほとんどですから、胸襟をひらいた恰好で楽しい岡村昭彦論ができればとおもいます。

題して「体験的AKHIKON論」ということにしました。それだけに話題は飛ぶかもしれませんが、かつて一編集者として、わたしはいかに悪態をつかれ、無能呼ばわりされたか。そして何を手に入れたか、要するに“教育者としての岡村昭彦”あるいは“啓蒙者としての岡村昭彦”の貌が伝わればよい、ということにします。

まず、岡村昭彦との出会いというところから語りたいと思います。実際に仕事として、出版編集者として相對したのは一九七二年の春です。それ以前にはベトナム戦争報道で衝動的にデビューして間もない頃に知人の写真編集者と一緒に会っています。講演会で話を聞いたこともありましたが、しかし、直接むきあつて話をするということはありませんでした。一九七二年といえは沢山のジャーナリストが亡くなったラオス進攻作戦で岡村さんがそのスクープ報道から帰還して間もない頃のことであり、『ライフ』の休刊一年前のことで、彼は何をすべきか模索し手さぐり状態でした。一方で、アフリカのピアフラ戦争取材がいかに大きかったかを書かなければならないといっていました。それは岩波新書で書くといひ、アジアの人間がアフリカに行くということ、それが書きたいということでした。「アフリカ

でやつと世界史のしっぽを掴んだんだ」、この言葉がとても印象にのこりました。そこで、出版企画の話になったのです。そうしたら「自分の撮ってきた写真を、歴史が撮れなかつた失敗の記録」としてまとめたい」というのです。

具体的には「HOW OKAMURA GETS THE STORY」報道写真の基礎知識、こんなテーマなら引き受けてもいいというわけです。当時わたしは『現代用語の基礎知識』をつくっている小出版社の編集者でした。彼の契約の条件は二つでした。ひとつは契約に際してのアドバンス（前払い）一〇〇万円、それに「専属の編集者」がつくこと、というものでした。けちな経営者だったのですが前払いは一発でOKで、破格な扱いでした。当時三〇歳だった私の給料は七万円ぐらいたつたとおもいます。そして彼の希望する「専属の編集者」は「優秀でなければならぬ」ということでした。ここで、ギャップが生じます。私は「優秀な編集者」どころかカスだったからです。彼には雑誌『ライフ』の編集スタッフの役割や仕事を想定しているわけですが、その後なにかといえは『ライフ』のスタッフは……という話を聞くことになりました。

とにかく、私以外の担当者はいないことに失望したことはまちがいありません。彼のわたしに対する語気からすれば、およそ次のようになりません。

「本気でやる気が、わたしはパーフェクト主義



者だよ。納得いかない本になれば、たとえ完成しても出版しない」

「世界に通用するジャーナリストを育てるための名著にしたい。それだけのものをつくる覚悟はあるのか」

「そのためには編集者もパーフェクトに仕事ができる能力のある人物でないとだめだ」

「脳（あたま）の出来が悪くてぼうっとしてゐる、たぶん君もそのタイプだとおもうが、失敗したときの責任は君にある」

「わたしは遺書を書いてから仕事に出掛けた人間だ。そんなはりつめた精神と四つに組むことがきみにできるのか」

今にしてみれば岡村昭彦らしい、としかいえないような悪い悪態でした。「できません」とここで引き下がっていれば関係は終わっていたはずですよ（笑い）。こんな口調で私を脅し萎縮させるに十分な視線をなげて仕事はスタートしたので。当時、彼はベトナムへの入国禁止、戦場を締め出された直後のことでもあり、気持ちも危機意識も荒みのなかにあつ

たはずで、非常に苛立っていたのでした。岡村昭彦はゆだんのならない、うさんくさい人物として業界の一部では警戒されていました。「岡村昭彦と本気で仕事をやるのか、たいへんだよ（やめたほうがいいよ）」という同情の声も周辺から聞こえました。

なぜ、ここで降りなかつたか。一言でいって彼のオーラに惹きよせられてしまったということでしょうね（みなさんだって、あの見え見えの“岡村昭彦”という役者ぶりは打ち消せないでしょう）。私は、いまさら何も体裁をつくろう気はありません。というより、むしろ隠さずにもっと晒してみようとおもっているのです。

岡村昭彦の醸すオーラから、ベトナムの戦場に出掛けたフォトジャーナリストはピュリッツ賞を手にした沢田教一だけではありません。かなりの人がベトナムの岡村昭彦を追いかけていったと聞いています。

「きみのようなタイプはベトナムでは間違いなく撃たれる前に“シエル・シヨック”で頭をやられているね」と言われたのは私ですが、彼のオーラに撃たれた人の中には、没後にも彼の被害者だったと名乗りをあげた人はなにも本多勝一だけではありません。岡村さんが亡くなった直後に「あなたも被害者の一人だったでしょう」と奇妙な同情と連帯感をもってわたしに接近してきた人物にいたのです。弁護士の日さん（岡村昭彦が特別弁護士を引き受けた金婚老事件担当弁護士）とはい

までも会おうと「被害者同盟をつくれればよかったですね」と笑いながら、その被害を懐かしがったりするほどです。

## 2

ここで岡村昭彦との出会いが決定的となった場面を公開しておきます。それは、彼がいう、いかにわたしが無能かつ最低の編集者であるかを晒すことでもあります。

出版契約をかわした直後に喫茶店でコーヒーを（彼は紅茶でした）飲みながら、早速日程などについて切り出そうとした矢先に、彼はわたしを試しにかかったのです。

「きみも当然読んでいるだろうが……」と唐突に『共産党宣言』とダーウインの『種の起源』について話しはじめました。わたしは曖昧にしたくなかつたので『共産党宣言』は読んでいたことあるが、ダーウインの『種の起源』は教科書が何かで抜粋程度でしか読んでいない、といったんです。すると突然「そんなきみとは仕事はやれない」といつて不機嫌に喫茶店を飛び出したのです。

それから彼はわたしを神田神保町に連れていき岩波書店の本だけ売っている本屋から文庫版の『共産党宣言』と『種の起源』（上・中・下）を買って求めるとわたしに手渡すのです。そして「これを明後日までに読んでください。読んで、わたしの家（目白）に報告にきてください」というのです。明後日は口

ンドンに発つ。「明後日の朝6時にいらつしやい」というんです。朝6時です。それまでにこの2冊読んでこいというわけです。とにかく彼の意図がわからないまま読んでいったわけです。

都電の始発に乗って出掛けました。朝6時、鍵がかかっていたのですが、おやじさんが開けてくれて岡村さんが起きだすまで応接間で相手をしてくれました。「きみがこんど昭彦と一緒にやる編集者か」「はい」。元帝国海軍将校の風貌を残した口元からは「仕事は最初が大事だよ。昭彦と仕事をしようとおもったら家族を犠牲にするくらいの覚悟がいるとおもうよ。昭彦は命かけて仕事するタイプだからね」と、親までが脅しをかけてくる始末です。

7時過ぎに、やっとおりてきて「こんなに朝早くからなんできたのか」と、二日前の指示を忘れていました。来た理由を話すと「それで『共産党宣言』は何年なんだ」「種の起源』は何年に出たんだ」ときくんです。「?」など口ごもっている。「あなた、読んできたではありませんか」と言う。もちろん読んできたんですけど。彼は要するに『共産党宣言』は何年、『種の起源』は何年に出版されたか。ついでに聞くけど、黒船はいつきたの。スエズ運河やパナマ運河は何時できたんだいと畳みかけるわけです。

「いつ、どこで、だれが、なにを、がわからないでいったい何を理解するんだ。日本の

ジャーナリストは、きみのような奴ばかり。文学青年あがりのインテリで『いつ・どこで』がまったくないんだよ。今年は何年なんだい」という悪態をついてきました。

わたしとしては『共産党宣言』については質問があれば何か応えようとおもっている。『種の起源』やダーウィンについても何とかが対応しようと思つて身構えていたのに、岡村さんが問いただしてきたのは「何年に出版されたんだ」「いつ書かれたのか」の一点ばかりです。これが咄嗟にはこたえられないわけです。

そこで再び「何だ、おまえ最低じゃないか。わたしの出版の条件は優秀な編集者と組むということだった」と言いだすのです。

この態度はいかにも彼の策略でした。正直、ぐさりときました。と同時になるほど、全くだ、と納得している自分が見えるのです。彼の指摘は間違っていたわけではないのです。彼のジャーナリストとしての方法、とりわけ近代史への嗅覚が並々ならぬものだ、ということはずぐにわかるからです。

『種の起源』や『共産党宣言』だけではありません。スエズ運河とパナマ運河は何年に完成したのか。「知りません」。君のように世界史に常識のない、頭がからっぽな人と一緒に世界を描ける本がつくれるだろうか。そういう仕事はきみとともにはできるだろうか。(冗談じゃない。本を書くのは岡村さん、あんただよ。金をふんだくった分だけ、きちつ

とやつてよね)。著者と編集者のあいだでは“意識の流れ”がひとつになつていなければいい本なんてできないよ。「知つていなければならぬ常識を編集者に教えるところからスタートしたら、百年たつても本はできないよ」

※因みに、この段階で結論だけは先に申し上げておかなければなりません。企画はなんとかその後“パーフェクト”に近づいたとはいえ、肝心の原稿はその後二年たつても、目処は立たず、ついに出版は中止!。『報道写真の基礎知識』については“まぼろしの名著”となりついに日の目を見ることはありませんでした。ですから、彼の言を待つでもなく編集者失格だったのです。それに伴いわたしも出版社を辞めました。その後はフリーランス・その日暮らしの波瀾(笑い)のなかで岡村昭彦とのつきあいが続くことになりました。

彼がわたしに要求したのはジャーナリストの常識の範囲ということでしょう。

『共産党宣言』が刊行された時代背景です。ダーウィンの進化論が何でこの時期に出てきたのか、そのことに執拗にこだわるわけです。『共産党宣言』の刊行はなぜ一八四八年なのか。日本でいえばまだ“黒船”以前です。しかし第二次産業革命以降の労働者階級というものです。既に欧州では大きい位置を占めています。鉄を素材とし石炭を動力源とする大工

業の発達のおかげで「万国の労働者よ、団結せよ」に象徴させたいということになるでしょう。

一方のダーウインの『種の起源』は一八五九年。「自然淘汰、即ち生存競争において適者が存続することによる種の起源」。この本はマルクスも「歴史的階級闘争の自然科学的支柱」と呼んだほどですが、進化思想をあらゆる分野に植えつけた決定的著作だったわけです。

岡村さんは、そこからスエズ運河の開さくの大工事が始められ（一八五八〜一八六九）海底電線が大西洋の底を縫って欧米両大陸を結んだこと（一八六六）、発達した電信網を利用して天気図が描かれ、日々天気予報が行われるようになったこと（一八五六）などをえんえんと話すわけです。

彼にはダーウインやマルクス思想や『共産党宣言』の理念が問題ではないのです。歴史や時代を目に見えるように伝える、それがジャーナリストの使命だと言いたかったのだとおもいます。

彼にはマルクスやレーニンなど関心はなく、読んでも積んでもいませんでした。もちろん、それは間違っていないかもしれません。「われわれはどんな時代を生きているのか。だから資本主義社会と、その歴史にこそ関心をもつべきだろう。マルクスを読むのではなくて自分で『資本論』を書くことだろう」と、正しい「はつたり」を噛ましたぐらいなんですから。

ところで、この『共産党宣言』『種の起源』による「教育的指導」いじめ」が終わった直後に本が二冊郵送されてきました。一冊は『科学文化史年表』（湯浅光朝・一九五〇年一版・一九六六年増補版第2版／中央公論社）でした。科学史、技術史、社会文化史を見開き二ページで一望できる年表で、実に緻密な編集がされたもので長いこと利用させてもらいました。もう一冊は『日本メートル法沿革史』（日本メートル法実行期成委員会・一九七二年・非売品）。地球の子午線をベースとしたメートル法はフランス革命の所産ですが、日本では七二年に尺貫法にかわる統一度量衡として正式に施行されたばかりで、その記念刊行物でもありました。

この彼のフォローの仕方がわたしの意識を刺激して、岡村昭彦とは本気に向き合わないとかやばいと思わせたのです。岡村さんはその後何度か本や資料を送ったり、手渡すことがあります。その際に説明がないことがあります。そのたびにテストかなとおもったものです。

### 3

一般的な世界地図をもってきました。岡村昭彦の「母親のための資本主義講座」にあるものです。みなさんもご存知で、勉強されたことがあると思います。三つの世界地図です。これは、世界はどこからみて「世界」なのか

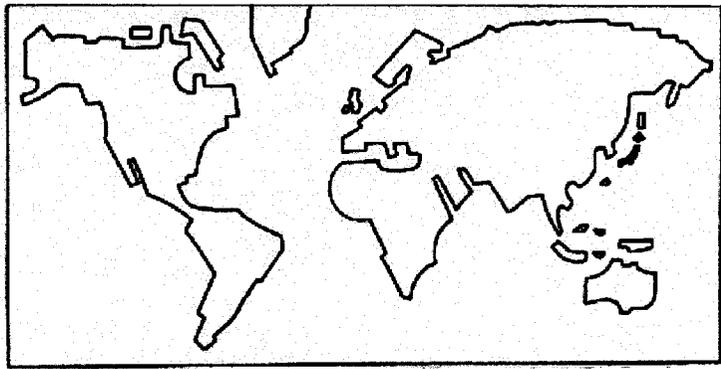
という観点と、もうひとつは歴史意識からみた「世界」という視点を教えてくれるものです。

岡村昭彦が分かりやすく差し出したことといえば、近代が世界を地続きにしていく過程として、マルクスのことばでいえば「資本主義が一つの輪」になつていく過程を、目に見えるように、つまり視覚化しておさえようという試みなのです。

ここに世界地図が三つあると彼は教えています。世界地図が三つあるということは、世界認識そのものが、三通りあるということになります。私たちがみているなじみのある世界地図すなわち世界認識は日本が真ん中にある地図になっています。そのほかにはアメリカ大陸が真ん中にある世界地図です。

けれど、世界史の概念からいったらどれもちがうよということを言ったんです。何かと言ったら、実はイギリス・ヨーロッパが中心に置かれているもの。これが世界的な俯瞰図としての正確な地勢地図ということになります。同時にこの地図には「現代」という歴史認識も埋め込まれているのです。

ヘーゲルの歴史哲学からいっても、一九世紀以降、つまり産業革命以降の「現代地図」というふうになるんです。イギリスが中心にあること。フランス市民革命とか、いろいろな意味も込めて現代という概念があつまっています。二〇世紀はアメリカの世紀といつていいものですが、この世界的認識からみれば



イギリスを中心とした世界地図

ば、アメリカがどのように大国として振る舞おうとも変わっていません。面白いのですが、〈世界〉の中心という観点にアメリカが立つとユーラシア大陸を分断してみせる以外にないということになります。

あわせて、日本が中心で左にユーラシア大陸を、太平洋をはさんで右にアメリカ大陸をしがたがえてみせる世界という概念はありえません。そういうことを知っておかないと、世界を知ることにはならないのだよと当時岡村さんはおしえてくれたのです。ですから日本はファー・イースト、極東地域になるわけです。世界の外れに位置しているということですから。この図の意味は、世界から後れをとっている地域を指しています。〈アジア的〉という表現が後進性の代名詞でもある所以なのです。いつもおかれてくる、後からついていく地域を象徴しているのが〈アジア〉なのです。その伝でいえば、アフリカは世界の外、歴史以前を象徴しています。これがヨーロッパからみた世界地勢です。

東南アジアという地域も日本からの規定ではありませんし中近東もそうですね。ただ、こういう世界が二十世紀末のいま崩れつつあるということですから。こういう世界史の構図が壊れつつあるということ、そういう段階に現在はきている、これも間違いありません。けれども世界とか世界史という概念はこの〈世界地図〉と切り離すことはできないとおもいます。

このことに関連して、前回のAKIHIKO忌の記念講演で玉木明さんが、岡村昭彦は世界という視野に立ったわが国最初のジャーナリストだったという指摘がありました。その通りだとおもいます。

私たちが世界史に登場する時期を近代と呼んでいます。アメリカが南北戦争後に奴隷解放宣言するのは一八六三年。ノーベルがダイナマイトを発明したのは一八六七年。同じ年に『資本論』が出ています。そういうときに幕藩体制が崩壊し日本に資本制が始まったわけです。日本史でいえば明治です。

資本の蓄積がない、要するにお金がないところで欧州の資本主義国の仲間入りをはたすこと、それが世界に参入するということだったわけです。アメリカと通商条約を日本が結んだとき（一八五八年）に、資本主義が世界を輪にした、資本主義がひとつになったわけです。その認識を岡村昭彦は「世界が丸くなった」という言い方でした。「資本主義によ

って地球がまるくなる」と。この表現は彼がいう「目でみえるように、触ってたしかめられるように」という方法と一つの方法におもいます。

ついでにいいますと、人類が最初に肉眼で地球をみたのは一九六一年のことです。ガガーリンは「地球は青かった」という事実を伝えました。要するに国境はなかったという発見までの一〇〇年。その段階で理念としての近代は終わったのだとわたしはおもっています。世紀末の現在、地球は人類の手で宇宙にまで拡張する道を模索しています。二〇〇二年には宇宙ステーションが誕生します。常駐する宇宙都市の住居部門を担当しているのが日本です。人類が生き延びるための理念は、もはや地表の歴史〈世界史〉軸の延長線上にはないということはたしかなことです。

そういう視点でもう一度〈近代〉にもどってみましょう。スエズ運河とパナマ運河をみてください。スエズ運河は一八六九年、日本史でいえば明治二年。茶積船の船底に隠れてイギリスに密航した伊藤博文の時代はまだ希望峰廻りでした。ロンドンに着き、地下鉄が煙を空気孔から吐き出している光景を見、郵便ポストを見ながら手紙が届けられる制度にただただ愕き立ち尽くしたという伊藤の経験は、スエズ運河誕生以前のイギリスです。

パナマ運河は一九一四年。大西洋から太平洋への道が一挙に短絡します。第1次世界大戦の最中ですが、これによって、ロンドン発

スエズ経由で日本に着く距離と、ニューヨーク発パナマ運河を経由して日本にくる距離はほぼ同じになるのです。その間のおよそ五〇年が日本が世界史のなかにがむしやりに突っ込んでいった時期ということになります。明治維新への“黒船”前夜という背景は運河以前の近代史という発想もなりたつのです。欧州列強国のアジア植民地戦略と植民地主義の失敗（アヘン戦争）がそうです。極東地域日本を手つかずにした、いうならば世界史のエアポケットに日本は落ちていたということになります。

岡村昭彦は「日本史があつてその外側に、世界史があるのでないんだよ」という言い方でそのあたりを語っていたとおもいます。このことは（世界地図）はそのまま（世界年表）に変換することができるということ、時間の軸は空間化できるし、逆に世界地勢は時間化することができるということ。そういうことをわたしは具体的に手に取るように教わったようにおもいます。

ジャーナリスト岡村昭彦が考えている報道の姿勢はそこにあつたとおもうのです。わたしは岡村昭彦の撮った写真は全部みているのですが、彼をいわゆるカメラマンだとおもったことがあります。彼がよく口にしていた三五ミリ×一〇五ミリのレンズによる構図とは、近代を視野におくシャッターチャンスのことであり、美意識や芸術意識とは無縁で、彼の歴史意識そのものだったという気がしま

す。

その段階で、彼と向き合うために私が思いついたことといえば、そうした世界地勢を自分の眸に埋め込むこと、いうならば世界史の時間を身体化するという試みでした。

どういうことか一寸説明してみますと、自分の臍を中世にみだてて胸のあたりを近代の領域とみなします。そこに日本暦と西暦年号をたしかめて、左手で世界史を呼び込み右腕で日本史を支えて胸で一つにする。要するに自分の身体をかりて歴史のパーツをファイリングする、そんなイメージトレーニングを始めたことです。岡村さんが近代史資料を読むときに文中にある日本暦の側に×印を付し西暦年を朱書きすることを忘れませんでした。それがヒントだったのです。

#### 4

さて、岡村昭彦はご存じのように博覧強気の人でした。新しい知識が次の発見を呼び、その次の課題が産まれるという感じできにかく自在に加速していきます。けれど、知識を独り占めするといったことには無縁な人でした。むしろ新しい事実や発見があると隠しておけない、早く伝えたい、そんな無邪気なところがある人でした。もうひとつは話すことによつて思考を整えたい、交通整理をして自らのものにしたというところでもあつたと

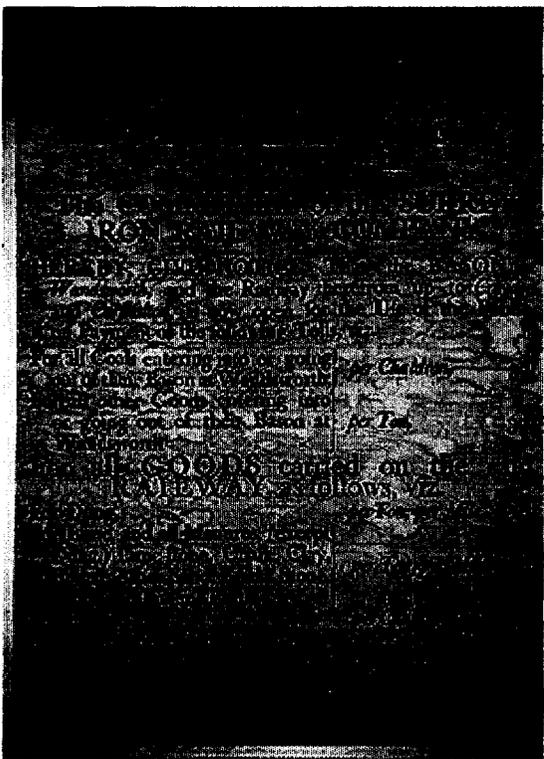
おもいます。ここで資料文献への彼の手つきについて話してみます。

先にも話しましたが、彼は唐突にどこからともなく書籍・資料の類を送りつけてくることがありました。彼のいう“意識の流れ（歴史意識）”を読み、ファイイルしておく（つまり、世界史の時空間に埋め込んでおく）技量が習慣的に身につけてしまうと、そう困ることとはなくなりましたが、当初はその意図がくめずに戸惑うことが多かつたものです。

その一つは出会つて間もない頃です。日付の異なる英国紙「タイムズ」と米国紙「ニューヨーク・タイムズ」「ワシントン・ポスト」が一組送られてきました。その意図がよくわかりません。紙面を辞書をひきながら追つてみても、これはいう記事は見当たりません。これも記事が大事だったわけではありませんでした。

帰国後の彼の説明から、欧米各国の紙面構成にはその国の無意識な権力スタンス、つまり世界認識、歴史観がそのまま表れていること、それを確かめてほしいということだったのです。

新聞のフロントページの扱いから「海外ニュース」紙面の位置づけまで、彼の説明はとても説得力があるものでした。なるほど、世界のニュースという視点から見るとロンドン・タイムズの「ファー・イースト（日本）」はあきらかに海外ニュースの欄外。当時、日本は



世界の僻地、世界の外という扱いでした。

もうひとつ、いまもわが家のトイレの前に吊るしてあるポスターの例があります。株式会社「SURREY Iron Railway」の貨物料金表です。石炭や肥料、火打ち石その他もろもろの鉄道貨物品目と料金が書いてあります。それは一八〇四年七月一日付けの原寸大（新聞大）をそのまま複製したもので、大英博物館で一般に安く頒布しているものだということでした（写真右）。

お分かりの通り、まだ蒸気機関車が登場しない時期の鉄道です。むろん、最初のロコモーションの設計図複製（スチインソン）もあわせて送ってくれたのですが、この二つの複写から歴史を讀め、ということだったのでしょうか。当時、岡村昭彦は（ということはおたしもということですが）鉄道史を徹底的に

追いかけていたことでした。

ついでに思い出したから補足しておきます。これは岡村さんから直接聞いた人もいます。

しよう。通常の日本の鉄道史の幕明けは一八七二年の新橋—横浜間鉄道開業（明治五年）

となつています。けれど、本当はそれ以前にすでに北海道で新しい時代が始まっていたのです。

そのあたりについては『五稜郭血書』『火山灰地』などの劇作家久保栄の作品、ことに『のぼり窯』の研究にふれた技術評論の星野芳郎の指摘が彼をいたく興奮させていたのです。当時の「講義・ノート」によれば、北海道の奥地の釧山で僅かに二マイルながら石炭運搬用の鉄道が敷設されていること。しかもその工事の任に当たっていたのはイギリス人であること。「日本本州には、一マイルどころか一鎖も見当たらん鉄道がどうしてこんな未開地に—」「わからんかね。もし、君が仮にフランス大帝國を植民地にしようとしてからいきなりパリにねらいをつけるのかね」という『五稜郭血書』の台詞に登場させています。これを朱書きし語んじていた時期だったのです。たぶん、彼は大英博物館でそのシーンを思い出して買い求め、送ってくれたにちがいありません。

さらにもう一つ、これも早い時期の失敗し

た話になります。一九七二年の夏でした。小

泉八雲（ラフカディオ・ハーン）を取材して、雑誌『太陽』に4回の連載が始まって間もなくです。松江から始まり、ニューオーリンズ、そして西インド諸島のマルティニク島に行つたときです。彼はそこからチヨコレートを2枚、新聞資料にくるんで送ってくれたんです。べとべとにくずれていました。変な味だなぁと思ひながら家族といっしょに食べました。帰国後に「チヨコレートはどんな味がした？」と聞くんです。お札を言いながら「甘くありませんでした。ちよつと変わった味でした」と返事した。すると「ばかッ。それを奴隷の味かな、奴隷の匂いかな、と想像してみなかつたのかい」と言うわけです。なるほどッ。そうか、とうなづいた途端にさらに「チヨコレートの包装紙も面白かつたらう」と言うんです。それは黄色い包装紙だったんですが、僕はとくに注意をしなかった。「だからお前は、山陰の消し炭」なんだ。俺がお前にチヨコレートを食べろといつて、わざわざマルティニク島から送るとおもうか」と怒鳴りつけるわけです。まったく、言われてみればその通りなのです。

この日以降わたしは「山陰の消し炭」というレッテルをはられ、しばしば愚弄されたのでした。「山陰」とはほくの出身地に由来しているだろうことは想像できたのですが「消し炭」という蔑称は理解できませんでした。後年になって聞いたかぎりでも分析してみる

と、(1)お前の火力(パワー)はぼーっとして弱い。(2)誰かが火をつけるとすぐ燃える。(3)かつて火が付くが肝心なときに力がでない。(3)もうくたばったかなーと思つていると、まだ消し炭のまま残つている——ということになりそうで、おもわず笑い、い抜かれていたようにおもいました。彼は誰彼に的確なニツクネームをつけて喜ぶタイプでした。

岡村さんはその後、もう一度同じチョコレートを送つてくれました。包装紙には影絵のようなかたちで労働者の姿が写しだされていました。ただ、そのときの味はなぜかとても甘くて、奴隸 イメージとは程遠いものだった気がします。帰国後のテストを予測して密かに「コーヒーと奴隸労働」についてフォロワー学習しておきましたが、彼はすでにチョコレートを送りつけたことも忘れて、次の新しいテーマでいっぱいになっているんです。そんなところにも彼のあくなき関心、煮えたいぎる意識の高さ、知識欲の強かさを感じたものです。

## 5

いよいよ一級資料としての「社史」の話をしたいとおもいます。が、それに関連して深夜の「電話・講義」についてふれておきたいとおもいます。時期にすれば、一九七二年後半から七四年。そして七五、七六年にかけてということになるでしょうか。それは、岡村

さんが浜名湖畔の自宅を大幅に改装(一階は当時はまだ幼稚園でした)して「俺がいないときだって誰でもここに来て勉強できる場にした」「どんな時代に生きているのかを考える場所にした」「そんな開かれた「民衆図書館」構想を打ち出し、行動を開始した時期とかさなつてもいます。この構想で集められた資料の中心が「社史」ということになります。つまり資本主義発達講座の資料ファイルがそのまま図書館の棚になるという展開になり、後の看護婦ゼミや勉強会のテキストになつて活かされることになります。

電話による「講義」とは一方的に私が名付けたものですが、当初は資料集めのお遣いさん程度の電話だったのが、「ダメ編集者」教育のつもりだったかもしれないが、間もなくして「定期便」のように電話がかかつてくるようになりました。

たとえば「今日手に入れた本にこんな面白いものがあつた」といい著者・発行所・発行年からはじめて具体的に「……、……」と引用しながら語るようになったのです。聞いているうちに、岡村さんはしゃべりながら考えをまとめていくのだ、ということがわかったのです。聞き役に徹することでこちらも勉強できるという「電話・講義」の時間になったのです。聞きながら「講義ノート」をとるようになり、結局つごう八冊になつていまも残つています。

彼は、いい資料にであつたり、新しい刺激を受けたとき、面白くない怒りがたまつているときなどは自らを鼓舞するように夜中でも電話がかかつてきました。そのあたりも「講義ノート」を手掛かりに再現できるほどです。やつてみます。

「おれ、いまだどんな恰好して勉強しているとおもう。……鉢巻きをしてな、鉛筆を三〇本削りなおしてな、二本の定規と五色のテープが机に置いてある。これから挑んでいくんだ。……実はきょうはとてもいい本にであつたんだ。近藤康男編の『硫酸』という本(一九五〇年・日本評論社)だよ。その序で、こんなことをいつているんだよ。

〈日本資本主義は半封建的農業—農村を基盤として成立しているといわれるときに、第一に考えられているのは低労賃の源たる追加的労働者が農村から供給されるということにあるとおもうが、資本主義にとつての販路という最大のそして直接的な接点は何かといえば、それは肥料である〉と。肥料だよ。まったくその通りなんだ。それも(単に肥料が農業生産に対して重要であるとか、商品の量が多いとかではなくて、一方では押しひしがれた零細農業を、集中独占を顕著に示したところの肥料工業資本とが、直接きりむすぶ場所である)と書いています。

近藤さんはすこいね。このへんの認識と証拠固めがないとだめだよ、わかるか。おれの横には、いま肥料史関係の資料が段ボール

二箱置いてあるんだ。これを明日中にやつつけてしまおうからな」

というように語ってみせるのです。

公害問題。ことに水俣病については彼のスタートが遅かったのです。それを取り戻すために集中して資料をあつめ読破していた頃のことです。「水俣にいつてみる。みんな闘うのを辞めて、みんな水俣病になろうとしているよ」などと憤りながら水俣・チツソを独自の観点を探していました。

彼は、その段ボールの資料一山を電話口でひとつひとつ説明しながら、そのなかに『日本窒素肥料株式会社（現・チツソ）』の社史と、その経営者の伝記『野口遼』があることを誇らしげにいうわけです。「肥料史を常識にしておかないと、団結して戦うぞ」なんて拳をふりあげたつて戦えないんだよ。資本は、強かなんだから」と。そして、あらためて鉢巻きをしめなおしている彼の姿が伝わってくるんです。わたしはそういう岡村昭彦がとても好きでした。資料は彼にとつては「武器」でもあったのです。

ついでに補足しておきますと、岡村さんは資料をファイルする際は几帳面でした。原稿もそうでした。鉛筆を削りながら「ここをを鎮める」のだといつて書きはじめののです。筆圧のつよい右上がりの文字が特徴でした。また、アンダーラインを引くときはトップに×印をつけから定規をあてて引き、五色のテープは葉、付箋がわりでした。これは大胆

に書籍の天地を突き抜けるかたちで挟む、テープによっては色を統一するということをしていました。

さて「社史」とは何でしょう。「味の素五〇年史」とか「東急電鉄五〇年史」等々。お判りのように各企業が節目の年に記念して「私家版」でつくつて社員や取引先に配付しているもので、非売品がほとんどです。企業がこぞつて「社史」を刊行する習慣は日本の特徴で欧米ではまれなことなんです。「後進資本主義国ならはのもの」だというのが岡村昭彦の指摘でした。このことは戦前に刊行された、いうならば近代資本制創草期に誕生した企業の社史編纂をみると、うなづけるものです。とにかく使命感がみなぎつており、業を起こす主張はどれも格調高いものです。それだけに欧米に後れをとつていけるけれども、企業としての先駆性と啓蒙性を強く自覚したものになっています。現在でいえば『国民生活白書』を編纂するほどの力量のある人たちが執筆しているのが目立っています。

今日も十冊ほど代表的な企業の社史を持ってきましたが、どれも戦前刊行されたもので、しっかりした編集と立派な造りです。巻頭には歴代の社長の写真をのせるのが社史の特徴です。が、けつしてバカにできないんです。起業の背景からはじまつて業界の地位、国家や社会への貢献等々が記されています。企業の営業実績が、ひとつの時代や社会、資本そ

のものを表現してみせるという点ではこんな面白い資料はありません。

今日のテープはもうひとつ「岡村昭彦が教えた資本主義発達史」ということになっています。いうならば「資本のないところで始まった日本の近代の始まりと展開」です。それは「社史」類を駆使して岡村昭彦がいかに目に見えるように、手で触つて確かめられるように話し聞かせたか、という話になるはずで、近代史を押さえる手掛かりに「社史」を方法として選んだというのが岡村さんらしい着想、着眼だったのです。

資本制社会の始まりといえ、金融資本の創出過程ということになります。銀行、保険、証券です。今日はそのなかで「保険」。損害保険、生命保険、火災保険の創成期にしばらく話す予定ですが、その資料となるのは各保険会社の「社史」です。それをつないでみると、実に手に取るようにみえるものがあるわけです。

損害保険は明治一二（一八七九）年の東京海上保険が始まりです。つまり、わが国最後の内乱（西南の役）が終わつた後でないと資本制は立ちあがらないんです。生命保険は明治生命（明治一四年）が最初です。火災保険は東京火災（現在の安田火災）で明治二一年に誕生しています。これらの社史をみると、へたな保険の解説書より分かりやすくかつ専門的で実戦的な記述になっています。「なぜ

損害保険は必要か」その歴史的背景から、どこで利潤を生むかといったことまでが記され、だれが関与して始まり、何に成功して失敗したかが実に堂々と書かれているのです。とりあえず生命保険の創始企業である「明治生命」の「社史」にふれてみます。

戦前の稲田勤編『明治生命五十年史』（一九三三年）窪田重次編『六十一年史』（一九四二年）。戦後には詳細な資料を含む二分冊

の『八十一年史』（一九六三年）が刊行されます。いずれも時代背景が異なり、記述表現もちがって貴重なものです。これらはいま古書店には出回りません。その他『本邦生命保険創業者・阿部泰造伝』（一九七一年）などが当時目に止まっていました。

生命保険の要といえは「死亡統計」です。けれども、国勢調査だつて大正期に入つてからですよ。この時期に死亡統計なんてあるわけありません。統計学もまだ未熟なんですから、人はいつ死ぬのか、どんな病気で死ぬのか、伝染病はどうするのか。そんなデータなんてあるわけがありません。そこで、イギリスの保険会社を実際に使っている死亡統計表の散値を改ざんしてスタートしますが、その数値表もしっかり掲載しています。それを眺めているだけでもおもしろいのです。

各社はお雇い外国人をかかえて立案します。欧州へは統計学者を留学させます。そんななかで日本人で世界的な死亡統計のベースを作るのが「矢野第一表」（明治二十七年）で知られる第一生命の矢野恒太です。この人の統計に関する業績は大きくて、現在でも名前を冠したすごい研究所があります。岡村さんの指示でこのときグラントの『死亡統計表』やジュースミルヒの『神の秩序』、ウィリアム・ペティの『政治算術』など古典統計学も読むようにいわれて買いにいったことがあります。

## 6

このように「社史」は日本の近代史には欠かせない一級の資料になるのです。

こうした資料を岡村昭彦はどのように集めたのか。どのように、といえは、あらゆる手段をつかつてということになります。「社史」もあらゆる社史を手に入れる。そのうちに産業構造によつて、或いは時代背景によつてある「社史」グループができあがります。その集合を繋ぎあわせていくとほんやりと見えはじめます。たしかなことは、徹底するということ。集め方でないかぎり、それは不可能だということ。また、自力で集めないかぎり身につかないということです。

その手掛かりといえはやはり古書店の棚を押さえることです。資料性の高いものや貴重なものは値段もはりますが、近代史の背景だけは眺めるだけでみえてくるからです。

まず古書店に通うことです。彼の後をついてとにかく歩きました。神田神保町の古書店街の本棚はどの段に何があり、その値段はB店のほうがやすいといったこともわかります。ただ、わたしは文学青年でしたから、文学系の棚は馴染みもあつたんです。しかし、岡村さんの資料はすべて社会科学系資料や人文学系資料として扱われるということ。その発想は新鮮でした。神保町では明治堂をはじめだいたい五、六軒で、出掛ければ必ずこれらの書店は一巡するようになりまし

た。東大前古書店は私たちの資料性からいえば常連になる店はなかったとおもいます。早稲田の古書店街では一軒でした。

資料として使いこなすにはこれらの書店の、それぞれの棚の本の並び方から店先に置かれた五〇円、百円の端本までを、あたかも自分の書棚のようにながめ触る、という習慣がつくようになるまでが大変でした。資料としての価値判断から値段の幅までおよそ見当がつく段階です。そうすると、不思議なことにそう買わなくなり新しい資料に出合うのが少なくなりませす。

岡村さんの後について歩き、手一杯に抱え込み買っていく姿をみると、当初はその繋がりになさく驚いたものです。けれど、ある段階にいくとどんな駄本をみても納まる場所があることも発見できるようになるのです。

歴史資料してみると、専門家の労作であろうと企業の社史であろうと技術書であろうとまったく同じウエートで扱う視点が必要だということがわかってきます。そして何が資料性なのか、また何が欠けているのかが見えるようになってくるのです。

ただ、決定的な資料であるかどうかの見極めは、無駄ともおもえる周辺の資料集めを惜しまないこと、これが肝心なのだということ。つまり、適当な資料のひとつ二つで何がわかったとはいえないこと。彼は仕事上でもよく「証拠力のつよい写真」という表現

をしています、それは単に法廷でつかえるというレベルの「証拠」ではないのです。岡村昭彦はその点について抜かりのない人だったとおもいます。「これは捨てていいという資料が見つからないかぎり、これはという決定的な資料にも出合わないものだ」というのが彼の言い分でした。ですから素人が古書に夢中になると単なる物知り博士になるか、珍本奇本をはじめとするお宝探しに血道をあげるかになるのです。つまりマニアックな世界に入っていくだけなのです。

いつの間にか岡村さんとは古書店で待ち合わせたり、ときに店ではばったり出会ったりすると「こんなところではばったり会うなんて、嬉しいね」といい「エスワイル」というフランス菓子のおいしい店で本の成果を聞くというところもありました。

ところが、一度、お茶の水から下った駿河台下の交差点ではばったり会ったときの岡村さんはとても不機嫌に怒りだしたのです。明治堂で買ったばかりの本を珍しく両脇に抱えこんで出たときです。彼は一瞥すると「おまえね、金魚のうんこみたいに俺と同じ本をいつまで買い込んで、楽しんでるのだ」というなり、わたしの抱えた本を歩道に放り投げるのです。「俺と同じ恰好して同じ本を追っ掛けたって、俺とお前はちがうだろ。そんな知識は何の役にもたないよ。サイゴンで取材だといっては僕の後をついてきたばかなカメ

ランがいたよ」と。

たしかにその通りだったのです。ただ、わたしも編集者として著者の仕事をおいかけただけではなく、実は自分なりの関心領域に社史資料が嵌まりだしていたのです。

「私なりにテーマはあります」「テーマはなんだ」「近代の住宅論、建築論とか都市論みたいところですよ」「みたいなどころってなんだ」という問い詰めにわたしは本を拾いながら精一杯反論したことをおぼえています。例えば、『大阪商船』とか『日本郵船』等商船会社の社史や、造船会社の『日立造船』社史なんかを拾って読んでいくと船室設計と住宅設計がとて類似しているのに気がついたりします。また、コンクリート住宅設計に関心をもつてみると、空調関係を含めて『倉庫業史』からはよく見えるんです。三菱倉庫の神戸「和田沿革史」では明治末期の港湾の隆盛にともなう倉庫業とコンクリート発達が深く関係していることがわかるのですが、これも同じ神保町の建築専門の古書店の棚を追いかけていては発見できないものなんです。

すると彼は、近くの篠村書店まで連れて行って上段の棚で埃をかぶっていた『台湾製糖株式会社史』（昭和一四年刊）を買ってわたしに手渡すのです。今日の中心の話とはずれますが、参考にとおもって、ここに持ってきていますから見てもらいます。とても貴重なものです。この会社は日清戦争直後（明治二九年）にいわゆる外糖ではなく自国でほしか

つた砂糖産出のため宮内省つまり天皇を筆頭株主とした国策会社です。社史には、台湾の「蛮族」の抵抗と襲撃の危険におびえた社員たちが銃をもち、私兵を雇いながら会社建設していった話が誇り高く記述してあるのですが、その堡壘にコンクリート造が試みられたことが明記してあるのです。「植民地というのは本国ではやれない実験とか、とにかく新しいこと、危険なことを最初にやったものだよ。『まぼり窯』がそうだったろう」それが岡村昭彦の指摘だったのです。

また、わたしが『明治工業史』のうち「建築編」を手に行っていると「そんなものよせ」というのです。『明治工業史』は一級編纂資料ですが「あれは学者の卵が欲しがらる資料で、役に立たない。あんなのを使つて論文書くようでは二流の学者にしかなれないよ」といい、『大林組』の社史や『丸の内今昔』とか『英国一番館』とか素のものがいいと勧めたりするのです。そして店先の一〇〇円コーナーで大正中期の『図解・市街地建築物関係法令』が手にして見せると彼はにっこり笑つて、いいものみつけたじゃないか、というのです。その本は警視庁保安部が編纂したものでした。つまり、市街地建築物は建築規制の対象ではなく、治安上からの規制が優先されていることを物語っているのです。私の最初の著作『都市の貌』（一九七九年）はそうした時期の岡村昭彦の影響がそのまま表出したものになっています。

ここまで来ましたから、もうひとつ。浜名湖畔・舞坂の自宅を図書館に変える時期の珍しい資料收拾の一端も話しておきます。

一階の改装が終わり、書棚が作られた直後のことでした。その書棚には筑豊の上野英信さんの家にあつた資料等も運んでくるのですが、同時に新たな資料收拾がはじまつたのです。そんなある日、東海道沿線の古書店巡りを二人でしたことがあります。弁天島駅から各駅停車で下つて豊橋、岡崎、岐阜へと牛乳とパンだけで『古書店手帖』（図書新聞社）というガイドブックを頼りにでかけたのです。地元を知る資料をあつめるというのが目的でした。ほとんどの書店が雑貨屋然としていて目ぼしいものがあるわけではありませぬ。ただ、おもいがけない本、専門古書店なら手がとどかない高価なものがただ同然だったりもします。それが地方古書店の楽しみのひとつです。

掘り出しものを手にしたのは岐阜駅前（裏）の小屋でした。錆びついた冷蔵庫や洗濯機などといつしよに雑誌や書籍が堆く積んであるのです。「捨ててあるのか」と覗いてみると古紙・廃品業者です。ここで、岡村さんは同業者になりすまして話しかけ世間話をします。やがて「この古紙のやまを讀んでくんないかい」と切り出したのです。地方ではよく書籍はゴミなんです。これが宝の山でした。信じられなかったのは大正期の少年雑誌だった

たり、裏表紙に中古の蒸気機関車の販売広告が載っている雑誌まで。さらに『ライフ』の五〇年代のバックナンバーがそろっているのです。よほどの家から出たものです。業者は「ゴミなんだからもつていきな」とぶつきらばーにいいました。岡村さんは耳をならして喜びを表現し、僕等は日が暮れるまで荷造りをしたのです。片付けの掃除まで手伝つて、一升瓶を置いて帰つたのでした。帰りの電車では、彼は終始にこにこして「ああいう親父つて、好きだよなあ」と何度も相槌を求めました。

そうやつて彼の自宅・図書館は完成したのですが、あれほど何度も通つた彼の図書館でしたが、亡くなった直後に書棚を見たときにはショックでした。資料の類が、古書の臭いといつしよになぜかゴミの山にしか見えなのです。蔵書や資料というのは主人がいてこそ生命力があるものだという気がしたものです。主人がいなくなった途端に書籍も色あせ力を失い、死んでいくものだという衝撃でした。

「岡村昭彦はやはり死んだんだなあ」とはじめて実感できたのも、実はこの本がゴミ・ガラクタの山に見えたときだったのです。

（一九九七年八月九日の夏季ゼミ「岡村昭彦の世界認識と着眼」の講演の前半部分を加筆したもの。後半の「社史が教える資本主義発達史―保険編」は割愛した。）

●「岡村昭彦を読む会」主宰・米沢慧(1994年2月～1997年12月)報告

★1994年テーマー (岡村昭彦の著作を読む)

- 第1回 (2月) 「訪問インタビューを観る」彼自身による広告。  
 (3月) AKIHIKO忌  
 第2回 (5月) 岡村昭彦集1「擬撮力のつよい写真」にふれて  
 第3回 (6月) 岡村昭彦集2「岡村昭彦と本多勝一」  
 第4回 (7月) 岡村昭彦集3「世界史のしっぽとはなにか」  
 第5回 (8月) ※夏季セミナー「日本・家族はどこへ向かっているか」  
 第6回 (9月) 岡村昭彦蔵書目録『シャッター以前』の解説  
 第7回 (10月) 生命倫理にふれて／三木成夫『胎児の世界』  
 第8回 (11月) バイオエシックスにふれて／生を受容・死を受容  
 第9回 (12月) ※歩みだすための素材「コード社会のモード(新語・流行語)」

★1995年テーマー (遠い戦争見えない戦争)

- 第10回 (1月) '90年代の戦争——むのたけじ・岡村昭彦『1968年』にふれて  
 第11回 (2月) 「自然・都市・民衆」——阪神大震災にふれて  
 (3月) AKIHIKO忌  
 第12回 (4月) 『シャッター以前II』の合評会  
 (5月) サリン事件、オウム真理教にふれて  
 第13回 (6月) 震災とボランティア／松澤和正『報道写真家岡村昭彦』を読む  
 第14回 (7月) 「マインドコントロール」「サブリミナル」  
 第15回 (8月) ※夏季セミナー「安曇病院見学」——医療ボランティア、その後  
 第16回 (9月) ボランティアの資質と思想(1)岡村昭彦の医療ボランティア  
 第17回 (10月) ボランティアの資質と思想(2)川田龍平くん—新しい日本人  
 第18回 (11月) ボランティアの資質と思想(3)いじめの時代と宮沢賢治の精神  
 第19回 (12月) 1995年総括——見えない戦争。岡村昭彦の現在をめぐって

★1996年テーマー (やさしさのトライアングル)

- 第21回 (1月) 「やさしさの病理」／吉田敏浩『森の回廊』を読む  
 第22回 (2月) ホームレスへの視点(新宿西口段ボールハウス撤去にふれて)  
 (3月) AKIHIKO忌  
 第23回 (4月) 『入院あんない』の思想——看護の夢・医療現場の可能性  
 第24回 (5月) 離陸する宇宙都市——ヒトがいま宇宙人になる！  
 第25回 (6月) 「患者よがんと闘うな」という視点  
 第26回 (7月) 『微笑』にみる戦後女性誌論—玉木明  
 (8月) ※夏季セミナー「若狭—満文庫・大阪原発」行き  
 第27回 (9月) 事件としての住居'96「餓死日記或いは死に配慮する生き方」  
 第28回 (10月) 「往きのいのち、還りの生命」そして医療の現在  
 第29回 (11月) 「往きの家族、還りの家族」  
 第30回 (12月) AKIHIKO'96「チョベリバから“援助交際”」

★1997年テーマー AKIHIKOを捜せ(われわれはどんな時代にきているのか)

- 第31回 (1月) 消費社会の安全とは何か(平成版「国民白書」を読む)  
 第32回 (2月) テレビ芸としての猿岩石(テレビ芸の現在)  
 (3月) AKIHIKO忌  
 第33回 (4月) 往きの住居・還りの住居——家族空間はどこに向かっているか  
 第34回 (5月) 「餓死のひと＝還りのいのち」新しい死の受容をめぐって  
 第35回 (6月) 「クローン羊ドリー」の誕生  
 第36回 (7月) 神戸少年殺人事件を考える——玉木明VS米沢慧  
 (8月) ※夏季ゼミ(於・軽井沢/小布施)  
 「いま、新聞報道はどうなっているのか」玉木明  
 「教育者 AKIHIKOが教えた資本主義発達史」米沢慧  
 「病院(医療)の現在、患者の現在」米沢慧  
 「コンピューターサイエンス(認知科学)から見た脳」本田親成  
 第37回 (9月) からだの自然性とはなにか 臓器移植法施行前に考えておきたいこと  
 第38回 (10月) 「インターネットと犯罪」本田親成  
 第39回 (11月) からだの自然性とはなにか②—身体の障害と介助の位相  
 第40回 (12月) '97年のうちに言っておきたいこと  
 吉田敏浩/玉木明/米沢慧

※「AKIHIKOを読む会」は毎月原則として第二土曜日午後1時から開催(倫理研究所8F会議室)。5年目に入りました。主宰は米沢慧。会員数は現在58人。出席は毎回10人前後。会員には毎月「AKIHIKO通信」を送っています。年会費は3,000円。参加は自由です。次回(第41回)1月10日(土)午後1時/<'98世紀末の視線・世紀末の死角①>

# コンピュータから見た人間の脳

本田成親 (ほんだしげちか・紀行作家)

1

コンピュータサイエンスと申しますと、一般的には非人間的なものだというイメージがあるのですが、実際は必ずしもそうではないのです。今日はそのことをお話したくてここによって参りました。

コンピュータサイエンス……ここでは特に「認知科学 (Cognitive Science)」という名称を用いさせていただきますが、この専門分野はまったく新しいものなのです。

一九六〇年代の半ば頃から、アメリカを中心にこの分野の研究が盛んに行われるようになってきました。現在コンピュータサイエン



スの最先端に関わる人達のほとんどは、この認知科学の立場からコンピュータの研究をしているわけなんです。人間の知覚の問題や認識力、思考力などの問題を、神という名の超越的存在に委ねるのではなく、人間の理性に基づいて一つひとつ説明づけていこうとしたのはギリシャ人が最初でした。いわゆるギリシャ哲学、換言すれば、合理性重視の科学的思考法の誕生です。そういったギリシャ哲学そのものの理念は素晴らしいものだったので、残念なことに、彼らにはその理念を實現するための確実な方法がなかったのです。

ところが、二〇年ほど前に、このギリシャの古典問題をもう一度根底から考えなおしてみようじゃないかという動きがアメリカを中

心にして起こったわけです。そしてその際、多くの研究者たちが強力なツールとして注目したのがコンピュータでした。コンピュータというものを媒介に、数学者、物理学者、医学者、文学者、言語学者、心理学者など、あらゆる分野の最先端の研究者の英知を結集し、もう一度人間の根源の問題を考えてみようじゃないかということになったわけで、それが認知科学という新たな学問領域へと発展していったのです。

認知科学においてはコンピュータはフォグメンテーション・ツール、すなわち、思考増幅の道具として、別の言い方をすれば、思考の顕微鏡、思考の望遠鏡として位置づけられたのです。コンピュータというものを、人間の思考を飛躍的に拡大発展させる補助手段だとみなした訳です。心の顕微鏡、心の望遠鏡と考えてもらってもいいですね。

むろん、シミュレーション (simulation) ツールとしてもコンピュータは重要視されました。脳の研究などで、コンピュータ技術を活用してシナプス (脳神経細胞) のモデルをつくり、人間の脳内で起こっている現象を詳細に調べるわけですね。また、コンピュータにはデータを高速処理する能力がありますから、複雑な立体構造をもつ図形の処理や医療診断システムの頭脳として活用されたり、核磁気共鳴反応を応用した脳の断層写真撮影や

脳の構造の解析に用いられるようになるようになりました。

人間の思考の原点は脳の中にあるわけですから、脳の各部の活性反応を調べながら、そこでどのようなことが起こっているかを實際調べてみる。また、一種のバーチャルリアリティ（疑似的人工仮想映像）技術を活用して精密な脳の立体映像をつくりだし、こういうメカニズムが働いているのではないかと推定しながらいろいろ細かいチェックをおこなっていくわけです。

まあ、そんなふうにはコンピュータを使いながら、文学や芸術の世界をも含めた様々な立場の人の知恵を結集し、人間というものを根源的に考えようじゃないかというわけですから、認知科学とは学際的ではないか、たいへんダイナミックな研究ジャンルなんですね。ただ、日本ではまだあまり知られておりません。

日本の認知科学会が発足したのは約十年前です。当時の若手研究者達……、今は彼等も中堅研究者になっていきますが、そんな研究者達が主体となって認知科学会を結成しました。いま私はフリーの身になって、モノ書きやっています。以前は研究者として大学に関わっていました。いろいろな若い研究者を育てあげました。そのなかの何人かがいまは認知科学会の主力メンバー

として頑張っており関係で、私のところにはその世界の研究情報がなにかと集まってまいります。そんな情報などもふくめて、この話を進めさせていただきたいと存じます。

## 2

コンピュータの研究に関わっている人間という、世間では冷たい非人間的な存在だという誤解があるんですが、最近のコンピュータサイエンスの一番原理的な部分に関わる研究者達は皆、人間というものがいかに凄いものであるかということをも再認識させられているというのが実際のところなのです。コンピュータサイエンスの研究を究極的に進めていくと、結局は、人間とは何かという問題に行き当たらざるを得ないのです。

最近も、オセロでコンピュータが人間の名人に勝ったとか、チェスでコンピュータが人間のチャンピオンを打ち負かしたとかいう話題がマスコミをにぎわしました。マスコミはなかなかそのあたりを書いてはくれないんですが、このニュースの裏にはちよつと考えなければならぬことがあるんです。コンピュータが人間に勝ったからコ

ンピュータが凄いというのは早計なんです。もしあのコンピュータが人間と同じようなヒューリスティックといいますが、極力無駄を少なくした効率的な思考方法で勝つたらそれなりに評価はできるんですが、そんなことやっていないんです。かなり人間的な思考法はプログラムとして取り込まれているとはいえ、全体的には要するにしらみつぶしの方法で、人間なら一目見ただけで指さないような手筋を全部検証しながら、計算力という腕力に任せてやっているだけなんです。だから、途方も無い演算力をもつスーパーコンピュータが必要となるわけです。

人間の凄さというのはもつと違うところにあるわけです。また、話をゲームに絞ってみても、例えば日本の将棋はヨーロッパのチェスに較べてはるかに複雑です。そのため、日本の将棋を最新のスーパーコンピュータに教え込んでも、とても人間の名人には及ばないでしょう。ましてや囲碁となると、コンピュータにとって人間の名人ははるかに遠い存在です。

現在は我が国のコンピュータサイエンスの第一人者になっている研究者がまだ東大の大学院のドクターコースにいたとき、コンピュータに囲碁を教えるということを研究のテーマにしたんです。彼は二年ぐらい

そのテーマに取り組んでいたんですが、その後たまたま会ったときに、「先生、コンピュータに囲碁をマスターさせようとしたんですが、とても複雑怪奇で、現代のコンピュータにはまだとても手に負えませんね」と言うのですね。アマチュアの初段とか、二、三段レベルはともかくとしても、プロ棋士の実力にまで到達されるのは絶望的に難しい……。ルールがずっと単純ではあるか、変化の少ないチェスだったら可能だけど、囲碁の場合は問題外だということです。その状況は現在も変わっていません。

詰め将棋などの場合でも、人間は誤った手順に入ると、それから先いくらやっても無駄だということが何となくわかり、そこで手を止めます。機械のほうは、ほっておくとそこから先も延々と続けていく。「どうやらこれは間違っているよ」という人間的な状況判断がコンピュータにはできませんから、何手以上に手数がのびたらそこで演算を中止しろとか、これこれの状況の時はその筋を捨てよとか指示するプログラムを組み込んでやらなければ、スーパーコンピュータといえどもたちまちパンクしてしまうわけです。

ところが、実際の将棋や囲碁では、その状況判断のプログラムを作るのが絶望的に難しい。囲碁などでは、「勝つ」ということ

がどういう状況を教え込むことさえ容易ではありません。ですから、コンピュータがチェスの名人を負かしたというだけで、すぐにコンピュータが人間を追い越したという話にはならないんです。しかも、コンピュータにチェスのプログラムを教え込んだのは同じ人間なわけで、コンピュータが自分でそのプログラムを考えただけではありません。

### 3

話は変わりますが、人間の脳の神経細胞はおよそ一四〇億個です。それに対して脳の十分の一の重さしかない小脳の神経細胞は一〇〇億個以上あるといわれています。いったいこれはなぜなのかというのは長年の疑問でした。これまで小脳には運動などに関わる二次的な機能しかないようにいわれてきました。大脳が殿様なら小脳は小間使の家来にすぎないとみなされてきたわけです。ところが、最近、コンピュータサイエンスサイドからの脳の研究が進み、小脳の機能について新たな発見がなされました。

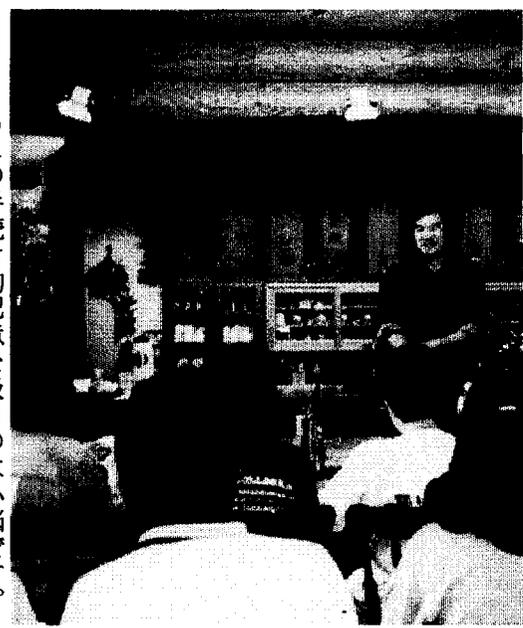
現代では、脳の研究は、従来のような医学や生理学、病理学的な立場にくわえ、コンピュータを活用した工学的な立場から研

究が行われるようになっていきます。工学的な立場から脳を研究する学者は、生理学の研究データをもとにコンピュータで脳の部分モデルやシナプス網のモデルを構築してそのメカニズムの探究にあたっており、近年の工学的な側面からの脳研究の成果には素晴らしいものがあります。

記憶には、まず「遺伝子的記憶」、すなわち、DNAの中に組み込まれている生物史的記憶があります。次に脳の働きによる後天的な「学習記憶」があるわけですが、これは三つに大別されます。

一つは脳内の海馬の働きによる短期記憶です。短期記憶を司る海馬という器官は、コンピュータでいうと現在作業中のデータを処理するCPUという演算装置に相当しています。

次にコンピュータのハードディスクやフロッピーディスクに相当する長期記憶があります。これは記述的記憶と手続きの記憶に分けられます。記述的記憶とは言語をはじめとするいわゆる知識に関する記憶で、それを実際に処理しているのは大脳です。いっぽう手続的記憶とは、自転車の乗りかたに代表されるように、長い生活の中で体感的に身につき、意識しなくても必要に応じて反射的に出てくる行動のベースとなる記憶のことです。運動能力と深く関わ



るこの手続きの記憶を扱うのは小脳です。

さて、小脳が運動能力と深く関わる手続きの記憶を処理する器官だということはいま述べたばかりですが、実はそれ以上の重要な機能が小脳にはあるらしいということがわかってきました。

小脳欠損者の場合、うまく主語と述語を結びつけることができない、例えば、主語と述語を正しく組み合わせる文章を完成するというような作業が全くできなくなってしまうというのです。

言語において単語のような意味的な知識は、大脳で処理しているのですが、一番根源的な発語行動の部分はどうも小脳がコントロールしているらしいのです。

自転車を操縦するときに、初心のうちには右に倒れるから左にハンドルを切ろうなどと大脳で思考するからうまくいかず、すぐ

倒れそうになる。ところがうまくなってくると、何も考えなくてもスイスイ乗れるようになる。むろん、その頃には自転車のハンドル操作は小脳によってコントロールされるようになっていきます。ところが、どうやら言語にも同様のことが起こるらしいのです。

言葉をおぼえたての子どもは主語と述語の使い分けがうまくできません。しかし大脳を使いながらたどたどしい発語を繰り返すうちに、やがてその処理プロセスを小脳が代替するようになり、そうなる後は自然に言葉が話せるようになるのです。

一〇〇〇億個以上も神経細胞のある小脳というのは、我々が想像していた以上に凄い働きをするところではないかと考え、そこに光を当てた人がいるわけです。アルツハイマー症の患者の脳を陽電子放射線断層撮影法を用いて調べると、大脳が機能していないのに小脳の部分が通常以上に激しい活性反応を示しているということがわかるのです。本来大脳がやるべき仕事を、大脳が正常に機能しないため小脳が代替しようとして活動しているからではないかと考えられています。

また、たとえば、一流のジャンプの選手やマラソンランナーなどが、どこでどうスピードを上げるとかいったイメージトレー

ニングをするとき、その選手の脳を同じPETを用いて調べてみると、やはり小脳が強い活性反応を示すのです。

どうやら小脳には大脳のシミュレーション機能があつて、大脳に不都合が生じた場合に備えて待機し、いざというときには大脳をバックアップするようになってい

#### 4

次のことは医学の専門家とコンピュータサイエンスの専門家との共同総合研究の結果として明らかになってきことなんですが、小脳には、五つの電子素子を三、四本の回線をつないだような構造ものがずらりと並んでいることがわかったんです。だが、それらがどのような働きをするかは全然解りませんでした。

ともかくそんな構造のものが一つの微小領域に五〇〇個程セットになって並んでいて、さらにそのセットが三〇〇〇〇個も存在している。しかも全部類似構造をしていたために、発見当時からこれは一種のバイオコンピュータではないだろうかと思像はされました。でもそれがバイオコンピュータだという証明はなかなかできませんでした。当然、それらがどのように機能してい

るのかということとは認知科学者達の間で大きな問題になりました。

この問題に対して、デビッド・マーというケンブリッジ大学の若手数学者が、おもしろい考えを提唱しました。

具体的な内容は難しいので、要点だけ簡単に話しますと、それは、「小脳内の個々の類似構造(前述した五つの電子素子を三、四本の回線でないような構造)同士をつなぐ神経伝達繊維シナプスを流れる情報量(電気信号の量)が一定ではなく、可変的、すなわち、その流れに強弱がみられ、それを論理的に説明できるならば、小脳のこの特殊なバイオ回路はコンピュータと同じ働きをすることができるはずだ」という仮説でした。

当然、世界中の医学者、生理学者、コンピュータサイエンスの研究者、物理学者、化学者、生物学者などはデビッド・マーの仮説を証明しようと懸命に研究に取り組みはじめたのです。

一九七三年には、かねてから記憶に関係あるといわれてきた海馬の神経細胞に高度の電気刺激を与えると、神経細胞と神経細胞が次々に結びついて網の目状に発達する、いわゆるシナプス結合の促進がみられることがわかったのです。

またその後、大脳においても同様に電氣的

刺激によるシナプス結合の増幅が発見確認されました。ところが不思議なことに、もっとも多くの神経細胞が集まっている小脳では、電氣的刺激や信号を与えてもシナプス結合が増幅されないばかりか、神経伝達繊維シナプスの可変性、すなわち、神経細胞を流れる電氣的情報量の変化もまったく検出されなかったのです。一時は、魅力的な仮説だがその証明は絶望的ではないかとさえ考えられました。

この問題を解決したのは日本の伊藤正男さんという方で、東大の医学部教授を経て現在は理化学研究所長をなさっています。ついでに述べておきますと、この伊藤正男さんと、いま一人、筑波の電子技術総合研究所首席研究官の松本元さんが、我が国における生理学ないしは工学面からの脳科学研究の最高権威です。伊藤さんも松本元さんもほとんどの方はご存知ないんですが、この方々は世界的に有名な研究者です。

伊藤正男さんはたいへん苦勞をしたあげく小脳の問題を解決したのですが、その業績は国際的に大変な評価を受けました。

実は小脳の情報伝達のメカニズムは研究者の想像に全く反するものだったのです。電波を増幅してテレビ画像を得るといったように、情報の伝達においては増幅という

考え方に立つのが普通です。だから研究者は、刺激を与えればそれが増幅されて信号として伝わりと考えたのですが、なんと小脳の情報伝達メカニズムは全く逆だったんです。

ある強い刺激が入ってくると増幅するのではなくて、その刺激の強さを抑制するんです。刺激量を逆に少なくし、その減少度の違いによって情報を伝達しているらしいことがわかったのです。それはコロンプスの卵の話にも似た大発見だったんです。

こうして小脳ということがはつきりし、神経細胞内を伝わる情報信号速度の違いによって情報蓄積や情報処理ができるということがわかってくると、小脳に存在する数千万本の神経繊維群も一躍脚光を浴びるようになりしました。

伊藤仮説によると、小脳は単に運動機能をつかさどるばかりでなく、大脳の機能をシミュレートしたり、脳のフィードバック機能や試行錯誤学習をつかさどる重要な役割になっっているのだそうです。小脳から大脳に数千万本の神経繊維が走っているのもその有力な証拠のひとつだといわれています。これはまだ一〇〇%証明されたわけではないんですが、非常に重要な仮説として、世界中で広く論じられるようになって

きているわけです。

## 5

さきほど、大脳は長期記憶のうち「記述学の記憶」を司っているとお話ししました。学習によって得られた大量の情報が大脳に蓄積されるわけですが、そのゲートは海馬と呼ばれる器官です。

海馬というのはギリシャ神話に出てくるネプチューンが乗った動物で、その器官の形状が海馬に似ていることからその名がつけられたのですが、その海馬を特に強く刺激する情報は脳へと伝達されそこで蓄積されます。このメカニズムはすっかり説明されたようです。

コンピュータのフロッピディスクやICという記憶装置内の記憶はその中の電気子信号を消してしまうと消えてしまうのですが、人間の記憶装置、生物学的な記憶装置というものは、いったん情報を放り込んだらその記憶細胞や記憶回路が死滅するまで消えないのです。だからこそ脳細胞は使い切れないほどの数があるのだろうと推定されています。死ぬまで記憶が消えないから地層のようにどんどん下層へと押し詰められて沈んでいくわけです。

だから昔の記憶を忘れるということは、

記憶が消えたわけではなく、記憶を表層までうまく引き出せないのだということになります。古い記憶は化石状態になって脳の下層に眠っているらしいのです。上層の比較的新しい記憶情報は直接に情報を処理する演算装置の海馬と直結しており、日常生活の多くはその上層部の記憶層に基づいておこなわれているのです。

また、各記憶層は連想をひきおこす連合的構造を持つことも明らかになってきました。単に記憶の地層として存在するばかりではなく、いざというとき働く連想ルートというものがあるらしいのです。すっかり忘れていたことを何かの拍子に思い出すことはよくあることですが、そういう連想をひきおこす回路がニューラルネットワークにはもともとあるらしいのです。

さきに述べましたように、大脳はコンピュータでいうとハードディスクやフロッピイディスクに対応しています。また海馬は演算装置(CPU)、すなわち様々な演算処理をする部分に対応します。この脳の構造の中に蓄積されるデータの部分が、神経細胞の結合という形で残されるわけですが、これが個性とか、人格とかいったもの決定しているのではないかと考えられます。

また昔からよくいわれていることなんです、生命の危機の時になんか走馬灯の

ように過去の想い出が巡るとい話がありますよね。死刑囚で実際に死刑を執行される途中で助かった人とか、瀕死の状況の中から生還した人などを対象に調査してみると、そういう体験をしたという人がかなりの確率で存在するそうです。きわめて短い時間に、幼い頃からその時までの記憶がスローモーション映画のようによみがえってくるというその現象はいったい何を意味するのだろうか、ということについては、認知学者がいろいろおもしろい解釈をおこなっています。

そのひとつは、人間というものは、避けたい生命の危機などに傾いたとき、自己防衛のためにその恐怖を和らげるように働く緩衝メカニズムをそなえもっているのではないかというものです。記憶の地層の最深部には普通は開かない特殊な栓みたいなものがあつて、もう駄目だというようなきや、病気などで現実死に死ぬ瞬間を迎えたときなどに突然この栓が抜けて、記憶の地層の底で眠っていた情報がダアーツと流れ出るのではないか、というわけです。非常におもしろい話ですね。

いづれにしろ、われわれが通常意識している過去の情報は長期記憶のほんの一部で、潜在化している部分が大半なのです。氷山と一緒で、ごく一部だけが「意識の海面」

のうえに姿を見せていて、あとは「意識の海面下」で眠ってしまったというわけです。そうだとすれば、将来的には潜在化部分を容易に引き出す方法が生み出されるかもしれません。そうなれば、もうすっかき忘れていた青春時代の想い出を鮮明に呼び戻したりすることもできるようになります。これはもう、ある種のバーチャルリアリティの世界ですよ。

ただ、いまは脳の断層写真は撮れますが、かつてナチスがやったような側頭葉に電極を刺すなどという行為は絶対に許されませんので、将来何かよい方法が開発されないかぎりその実現は困難でしょう。

この話は逆に怖さもありません。養老孟司さんが唱えていた唯脳主義ではありませんけど、もしも脳の情報をコントロールすることが可能になれば、実際には存在しない非リアリティの世界を小さいときから見せつけ、現実世界を見せなければ、その人間にとつては自分が見せられている世界が現実の世界だということになってしまいます。SF的な世界の話に思われますが、そんな可能性も近い将来起こりかねません。

## 6

脳は非線形型バイオコンピュータだとい

われます。非線形型というのは簡単に言うと一定の方向性を持つ論理では説明できないものというふうに考えていただけによいでしょう。数学的には線形とはある要素の集団の特性を平均すると一定の規則性を示すようなケースを言うのです。逆に、非線形とは、そういう一定の規則性だけでは単純に証明できないような特性をもつものと言えます。

情報の処理というと、俗にいう要素還元的方法、なかでも典型的なデジタル思考を我々はすぐに思い浮かべるわけですが、デジタル的手法では、物事の全体を細分化して個々の断片の特性を詳細にしらべ、それらをもう一度組み合わせることによって全体像を浮かび上がらせます。

しかしそれにはやっぱり限界が伴います。人間の脳の各部分は、それぞれの機能を持つと同時に、他の部分との間で、これまでの科学技術では解明できないような複雑に交錯した総合的な情報やり取りが行っています。その回路は複雑かつ立体的な網の目構造をしており、いわゆる非線形のバイオコンピュータとなっています。

したがって、部分を詳細に研究しその結果を集積すれば全体像が解明されるというわけにはいきません。

ただだからといって、研究を諦めるわけ

にもいかないわけですから、脳科学者たちは、脳神経細胞の疑似的なモデルを作つて、それに電気信号を与えるとランダムに疑似神経細胞どうしが結合するようなシステムをもつコンピュータをつくりました。そしてその中で神経シナプスとシナプスがどういう刺激を与えればどう反応しどう結合するかを調べようと考えました。

要するに、本来の人間の情報をうまく処理できない現在のコンピュータをより人間的なものにするために、医学工学両面から生物学的コンピュータ、とくに脳型のコンピュータの研究を進めようとしたわけです。それがニューラルネットワークコンピュータと呼ばれるものです。

多くの研究者が様々な角度からニューラルネットワークの研究を行っていますが、なかでも世界最先端の研究をしているのが松本元さんのグループです。この人は研究対象を大脳・小脳を捨ててまず海馬に絞りました。どうして海馬に絞つたかという、海馬の神経細胞というのはもの凄く活発で研究しやすかつたということがあるわけです。

ただ、海馬といつてもその神経細胞数は膨大ですから、松本さんは、海馬のある断面だけに含まれる神経細胞分布モデルをニューラルネットワーク・コンピュータ上に

つくりシミュレートするということを考えました。その結果、いろいろなことが明らかになってきたのです。

脳梗塞の患者の場合には海馬の細胞が死んでしまうことが多い。そういう患者さんを調べてみると、海馬に損傷が生じる前の記憶ははっきりしているんです。ですが最近の記憶がはつきりしない。たとえば海馬を損傷した患者になにか絵などを見せ、そのあとそれを隠して絵についての質問をするのと全然記憶に残っていないんですね。だから海馬というのは短期記憶、すなわち、現在進行形でのデータを処理する部分だということがわかります。

また、どうして海馬損傷者が過去の記憶を覚えていかというと、それらの記憶はすでに大脳に入っているからひきだせるんです。ところが現在の出来事を記憶処理する海馬の部分が働かないと、直前に起こったことが分からなくなる。海馬がひどくやられてしまうと、そこが情報のゲートですから大脳に情報が届かなくなる。

海馬の機能が正常な場合、与えられた刺激の一部が大脳に行くわけです。何でもかんでも大脳に行っていたらたまったものではない。つまらないことまで全部覚えていたらそれはそれで大変ですから、海馬で情報を取捨選択し、刺激の強いものだけを長

期記憶を司る大脳に送り込むようになっていくわけです。

お酒を飲む人の場合によく起こることなのですが、ひどく酒に酔うと一時的に海馬の機能がマヒすることがあるんです。ひどく酔っ払って、ご本人はそのときのことを全く憶えていないのに、不思議なことに帰ってくる道順だけはちゃんと覚えていて帰ります。それはどうしてかと言うと、駅から帰ってくる道順、これは大脳の長期記憶の中にしっかりとしまっ込まれているから大丈夫なのですが、短期記憶を処理する海馬の一部がマヒしてしまっていたため、どこを通ってきたのか全然記憶がない。海馬というのはそんな不思議な器官です。

## 7

松本元さんと話していて笑ってしまいましたんですが、真の研究者の努力がどんなに凄いかという話をちよつとばかりしてみます。

松本元さんは脳の研究を進めるあたつてまず生きた神経細胞の研究をしなければならぬと考え、生物の神経細胞の中で一番大きな神経細胞をもつイカに目をつけました。そこで研究所でイカを飼うことになりました。ただ簡単に死んでもらっては困るから、どんな環境だったらいかがか長生きするかま

ず研究始めたんです。

ところが困ったことにイカがすぐ死んでしまう。食塩濃度を調整したり水流を工夫したりしてもうまくいかない。他の意地の悪い研究者達は、イカは今日何匹死んだと、わざわざ醬油を用意してやってくる有様だったとか……。

水槽の壁にぶつかるからだとか、固体が多すぎるからだとか考え、いろいろやってみたがやっぱり駄目だったそうです。原因を突き詰めていくうちに、活性反応のなかでイカが放出するアンモニアが原因らしいと解ってきました。そこでアンモニアを除去しようとして、いろいろなアンモニア除去装置を使ってみるんですが、やっぱりうまくいかない。この時点までで三年半が過ぎたんだそうです。

電総研のお偉いさんに「きみ、いい加減にやめろ。国の予算でやってるんだから」と言われ、松本さんも止めようかと思つたそうです。

研究に疲れてたまたま大磯の海岸にいき、潮だまりの生物を見ているうちに、「イカと同じ軟体動物でアンモニア発生するはずなのになんでこいつらは死なないんだ」と疑問を持った。アンモニアを分解する自然のバクテリアかなんかがいるのではないかと閃いて、すぐその砂をもって帰って分析

したらば、確かにアンモニアを分解するバクテリアがいた。「これだ」というわけで遂に成功をおさめるんですが、ここまでで五年かかったそうです。

こうして生きたイカの神経細胞が研究できるようになったあと、得られたデータをもとに神経細胞の結合モデルをコンピュータ上でどう実現するかを検討に入り、ほかの生物の神経細胞をあわせて研究し、最後に人間の神経細胞のモデルをつくった。これを実際に見せてもらおうとおもしろいんですが、一部に刺激を与えると、まるで一点から明りが広がるみたいに周辺の神経細胞に活性反応が広がっていくんですね。

こういった基礎研究からわかったこと、それは実は皆さんがよくご存じのことなんです。常に情報を入力し海馬を活性化しておく、海馬は通常よりも何倍も反応速度を増し、反応領域も広がっていく。ところが情報入力をやめると、一日か二日ですぐ元に戻ってしまう。ルーティンワークが必要なことが、科学的に裏付けられたというわけです。

また、一夜づけの試験勉強で憶えた知識が試験が終わるとすぐに消え去ってしまうのは、知識が海馬の段階に留まり、大脳には達していないからなんです。まあそういうことなども海馬の研究から解ったのです。

短期記憶として処理されたデータのうち刺激の強いものは、睡眠中などに大脳に送られ長期記憶として蓄積される。その場合大脳皮質を電気刺激が刺激するので夢をみるのではないかと考えられています。

松本さんをはじめとする研究者の工学サイドからの脳の基礎研究を通してわかったことでもっとも重要なことは、「人間の脳というものは、自分の存在を意義深いものだと自ら思う、ないしは他者からそう思わせることによつて最大限に活性化する遺伝構造をそなえたコンピュータである」ということです。

なんとも厄介なコンピュータなんですが、換言すれば、「脳は意欲で働くバイオコンピュータである」とも言えるわけです。優れたプログラムがあればよく動く物理的コンピュータと違って、脳というバイオコンピュータはそういう変わった特性をもつ、きわめて自己中心的なコンピュータなのです。

このような脳のメカニズムがある程度わかってくると、過去に世間で言われてきたのとは違った意味での偏差値教育の欠陥が浮かび上がってきます。それはどういうことかという、現在の学校教育制度のなか

では、宿命的ともいうべき受験戦争を勝抜かなくてはいけない。そうすると小学校から高校まで、試験というと、易しい問からやつてなるべく高得点をとるように教え込まれます。教育者も無意識のうちに、「易しい問題からやりなさい。難しい問題から時間かけて解くのはもっとも下手なやりかただ」と教えるわけです。

いったいそんなことを小学生六年間、中学生三年間、高校生三年間の計一二年間もやっていたらどういうことになるでしょうか。人間の脳のバイオコンピュータ回路には、非常に難解でチャレンジングな問題に対応する機能も生まれつき持っているわけです。

ところがその部分を使わないと、肝心の回路が退化していつてしまふ。チャレンジングな問題に挑むための回路をせっかく持つて生まれても、気がついたときにはその思考回路は機能と活性を失つてしまっている。たいへん恐ろしいことです。

非チャレンジングな教育というものは、チャレンジングな生き方をする能力も完全に退化させるわけです。ただし、パズルじみた難問をスバルタ的なやりかたで教え込めばよいというわけではありません。

また、脳というバイオコンピュータのもうひとつの特性は、マイナスの連合性をも

つということですが。

具体的な例でいうと、先生がきらい↓数学がきらい↓学問きらいとなっていくような思考推移の構造ですね。

ずっと以前、大学で数学の学生を教えていたことがあるんですが、数学科の学生の多くが、専門課程に進む頃になると、「数学科以外の学科だったらどこでもいいから転科したい」と言いだすんです。

専門の数学の世界においては、いわゆる受験の数学的な能力とはまったく違う能力が要求されるんです。受験名門校出身の学生は、入試では凄い高得点で入学してくるのですが、統計的にみていると、一部例外はあるにしろ、専門的な研究の世界にはいつていく者はほとんどいない。それに対して、地方の普通の高校出身で、でギリギリの成績で入学してきた学生が多いんです。彼らは自分なりの方法論を身につけているからです。

近年、東大の物理科とか数学科に入ってくる学生というのは、受験問題では高得点を取るんですが、真の意味でのチャレンジ的な問題に対する思考回路をすっかり退化させてしまっている者も多いのです。大学での数学の専門研究の場では、学生達は、解決するのにどれだけ時間がかかるかわからない問題とか、正解があるかどうかさえ

わからない問題とか、意味不明な多重解がある問題とか、誰に相談し、何見ても構わないというような問題に立ち向かわねばなりません。チャレンジ的な回路が退化してしまつた学生は、そういう問題には対処できないわけで、だから他の学科に移りたい言い出すわけです。

最近では東京芸術大学の大学院生相手に講義をすることがあります。数学を教えるわけではなく、なにかしらのかたちで芸術的発想に役立つような数理科学の思考法とか、コンピュータグラフィックスの原理や技術とか、数理哲学的ものの見方などの講義を交えた変わった授業をやっているんです。

その芸大の学生達とつきあううちにもおもしろいことがわかってきました。数学は大嫌い、物理などは見ただけで頭が痛くなるというのが芸大生の相場なんです。実際に彼らと付き合ってみると、東大などの理学部の学生より数学的素質があるのではないかと思われる学生が結構いるんです。

日本の受験教育の中で数学が嫌いになつてしまつたけれども、本質的な思考能力というのはこのような学生たちのほうがあつたように思うのです。実際私が関わつた芸大の院生のなかで、芸大の大学院をおえたあと、東工大に移り数学の研究を始めた者がいるんです。

## 9

「脳は意欲で働くバイオコンピュータだ」ということに関しては、松本元さんの、心に残る体験談があります。松本さんはMITなんかに随分行っておられて、向こうでも同様の事例報告を度々ごらんになつていたようですが、以下の話は、ご自分の実体験として直接に伺つたものです。

当時筑波大学付属高等学校に通つていた松本さんの親しい知人のお子さんが交通事故に遭いまして、右脳をひどく損傷し集中治療室にかつぎ込まれたのだそうです。しかし瞳孔も開いており気管を切開して酸素を送る状態で、右脳が完全にやられているから、このまま植物人間になる可能性が高く、たとえ意識が回復しても半身不随の状態でしょうと医者から冷たく言われたそうなんです。

絶望の淵に追い込まれたご両親はすぐに松本さんに状況を話されたんだそうです。ところが、MITで研究しているときに、脳の損傷者が奇跡的に復活した事例をたくさんみていた松本さんは、一瞬間くもものがあつて、そのご両親に向かつて、「たとえ医者者が何と言つても、騙されたと思つて自分の話を聞いてほしい。脳というのは損傷を

うけたあと、すぐその場で刺激を与えずに時間をおいてしまふと回復不能になつてしまふ。たとえ意識不明だろうが何だろうが、手足を擦ったり語りかけたりしながら、いかにお子さんが自分達にとつて欠かせない存在かを、心からの愛情を込めて伝えるようにしなさい。死んでしまつているように見えても、脳は必ず見えないところで活性反応を持続しているはずだから、そうやつて脳に活性を与え続けていれば、回復の可能性は十分あるから……」と伝えたのだそうです。

医者の方は「やつても無駄ですよ」と言つたらしいのですが、その御両親は松本さんの指示を実行したわけです。

松本さんはニューラルネットワークの研究を通して、人間の脳細胞というのは他の部分の細胞と違つて代替復元力が強いことを知つていたんです。

脳細胞だけは、原形質のアメーバみたいな非常に強い復元活性力を持つているうえに、損傷部を代替する機能が残された組織部に再生されるらしいのです。医学的には完全に証明されてはいないのですけれども、大脳でも小脳でも未使用領域がたくさんあることから解るように、脳だけは極めて不慮の事態に対する適応能力が高いようなのです。

やがて奇跡が起りました。三カ月後にはその高校生が回復したので、医者の反対を押し切つて右脳が欠損している状態の中で筋肉トレーニングを開始、そしてなんと七カ月後には歩行ができるようになったんです。

医者は、医学的に考えてそんな馬鹿なこととはあり得ないと主張し、再度脳の断層写真を撮影したんだそうですが、やはり右脳は欠落したままだったのだそうです。

そんな理由を完全に説明することは難しいことなのですが、恐らく左脳のどこかが代替機能をしているに相違ありません。またシミュレート機能をもつ小脳も残つていることですから、それもまた重要な役割を果しているに違いありません。とにかく人間の脳というものは不思議なものです。

なお、この話には後日談があるんです。彼は元氣になつて学校に行き始めたんですが、担任の先生が、「話によると君の右脳は欠損しているそうだから、ここは受験校だからといつてあんまり無理しなくてもいいよ」という、不用意な一言を吐いたんだそうです。

ところがそれを言われた瞬間からまた左半身がびたりと動かなくなつてしまつた。また元に戻すのに三カ月もかかつたそうです。「君は学校にとつても社会にとつても重

要な存在価値があるんだよ」ということを切々と語り続けたら、ようやくも通りに身体が機能するようになったとのことで、現在は普通の人と同じ日常生活を送つていそうです。これは本当に凄いことだと思います。

創造力があるか否かは、もつて生まれた創造力に関わる部分の神経細胞を使うかどうかにかかつており、後天的な社会環境による影響が大きいと言われるようになっていきました。

人間というものはなんとも厄介なもので、創造的、個性的であり過ぎると社会的協調性を失つてしまふし、社会的協調性を持ち過ぎると創造性や個性のほうが失われてしまひます。両方バランスよくというのは言葉上はやさしいことなのですが、脳回路の構造上は相反するそれら二つを同時に実現するのは難しいことのようにです。

## 10

脳の不思議さを伝える話に次のようなものがあります。

いわゆる知的障害のあるお子さんがいたんですが、奇妙なことにこのお子さんは暦算の天才だった。他の部分では知的に立ち遅れているのに、複雑なカレンダー算だけ

が正確にできるんだらうと学者の間で話題になった。そこはアメリカのこと、相当なお金をかけてその謎の解明のためにMITの教授と大学院生がプロジェクトチームを組んで三年間にわたる研究をするんです。結局は謎を解明できず、研究そのものは失敗に終わるんですが、研究に関わっていた大学院生の一人が、プロジェクトが終了する前後になって突如計算ができるようになったというのです。

それを知った教授は喜んで、おまえなら即座に計算をおこなう場合の思考プロセスを明快に説明できるだろうと発表を促したのですが、当の大学院生本人はなぜ自分にカレンダー算ができるのかわからないというんです。結局、謎は未解明のままに終わってしまいました。

まるで「信ずれば成る」という格言みたいな出来事ですが、人間の脳には、ある範囲内ではあるでしょうけれど、何事かが出来なければならぬと強く思うと、その思いになんとか対応しようと働くメカニズムが隠されているようなのです。

要請に応じるために複雑なシナプス結合が新たに生じてもするのでしょうか。ちょっとばかり神秘的な話なんです、難題を処理する必要に迫られて、それが可能だ自己暗示をかけたりますのは、それなりに意

味のあることらしいようなのです。

例えば数学には閃きが必要だといいますが、何にもしないで閃きは出てこない。閃きが出るまでには苦しい思考の連続が必要なんです。そうしているうちにチャレンジングな思考回路がすっかり形成され、多分小脳まで及び、そうやって初めてめ無意識のうちに閃きが出てくるようになるのです。「信ずれば成る」というと何やら宗教がかつた響きがあつてちよつと戸惑いを覚えるのですが、まったく意味がないことではないのかもしれない。

## 11

フレーム問題とは、人間の脳に似た仕組みを工学的につくろうとする際に必要な主要構造の策定のことですが、これは容易ではないでしょう。脳科学はまだじまつたばかりに過ぎないのです。未解明のことばかりで、先端研究に関わる脳科学者やコンピュータサイエンティスト達は、人間の脳のもつ能力がいかに凄いか、その機能がいかに神秘的かということを感じさせられているのです。

脳の連想作用は重要ですが、そのキーとしての日記の効用というものを私はよく学生達に話します。長い日記はつけないんで

すが若い頃から簡単な当用日記はつけてきました。それも毎日は書かず、一〜二週間に一回ぐらい日記帳を開いて重要な出来事のある日のページのところだけ、簡単に書き込みをします。

日記というのは格好よく書くことと思つたりすると、結局嘘を書いたりしてろくなこととしません。だから、連想を呼び起こすようなキーワードを一言だけ記入します。その一言があれば、ずっとあとになつても、その言葉が糸口になつてすっかり忘れていた記憶がパツとよみがえってくるわけです。この年になつて昔の日記帳を開くと、エエーッ、こんなことあつたのというような思い出が記憶の地層の奥からよみがえってくるわけです。

だから学生に向かつて、「お前ら若いから、恋愛をはじめいろんなことがあるだろう。それを正直に書く必要はないが、自分だけわかる短いキーワードだけは残しておいたほうがいい。僕みたいな年になつたときにそのキーワードを見るとすぐに記憶がよみがえってくるけど、もしそれがなかつたら過去は空白ただけになつてしまふ。それじゃ折角の人生をドブに捨てるようなものだからね。日記の効用はそのへんにあるよ」と言つたりするわけです。

名文を書けとかいうことでなく、人間の

脳の特異な連想性を生かす工夫をしておけ  
というわけなんです。

資料のドーバミンの話は省略しますが、  
ドーバミンは人間の精神を高揚させる脳内  
物質で、麻薬などを投与したときも大量に  
放出されます。

以前ある人から次のような話を聞いたこ  
とがあります。その人は若い時代に特攻基  
地のあつた知覧で特攻に出撃する航空兵達  
の医療管理をしていたそうなんです。一般  
の人々の間では、特攻兵達は厳しい精神訓  
練だけによって祖国のため天皇のために死  
んでいくように仕向けられたと思われてい  
るようだが、実はそれだけではなく、精神  
を高揚させるために麻薬を投与したのだと、  
その人は話してくれました。実際そうだっ  
たのでしょうか。

脳科学が進歩するのはよいのですが、社  
会全体の問題と絡めて常にその正否を判断  
していかねばならないでしょう。認知科学  
やコンピュータサイエンスの先端の研究者  
は、人間というものの凄さをあらためて実  
感しているところですよ。認知科学のテーマ  
は他にもいろいろあるのですが、今日のこ  
ころは脳の研究とコンピュータの関わりに  
ついて、おおまかなところを話させていた  
できました。

ご静聴どうもありがとうございます。

## 事務局便り

1 「AKIHIKOの会」の活動の一つとして、  
毎月一回「AKIHIKOを読む会」を開催  
しています。

恒例となった「夏季特別セミナー」を、今年  
は八月九〜一日にかけて、避暑地軽井沢の  
岩城邸、それに小布施町・新生病院を会場に  
開催しました。

今回の会報は、参加しなかった皆さんにも、  
その雰囲気をお伝えしたくて発行することに  
しました。テープ起こしなど、また大住敏子  
さんにお話になりました。

2 当日の参加者は一九名、当初の予想を大幅  
に上回り大盛況でした。

講師は、『ニュース報道の言語論』の玉木明氏、  
数学者であり、紀行作家の本田成親氏そして  
読む会主宰の米沢慧氏。

二日目の新生病院での模様は、地元ケーブル  
テレビで、後日、放送されました。

3 なんと言ってもお世話になったのが、お宿  
を提供してくださった岩城桂子さんと、小淵  
登美子さんです。楽しかった軽井沢での露天  
風呂。カヤの平で、ブナの森に放牧された牛  
ステーキとワインのおいしかったこと、今回  
参加できなかった方にはお気の毒ですが、ご  
ちそうさまでした。おふた方と、ブナ森をこ

案内いただいた東城厚氏に御礼を申しあげま  
す。ありがとうございます。

4 第三回「AKIHIKO忌」を左記の通  
り行います。詳しいご案内は改めていたしま  
すが、日程だけでもあけておいてください。

記

とき 一九九八年三月二日(日)一四時から  
ところ 日本出版クラブ会館(東京・神楽坂)

5 「AKIHIKOの会」の活動は、年一回の  
「AKIHIKO忌」と不定期の会報発行、  
毎月一回の「AKIHIKOを読む会」など  
です。会費、会則、会長なしで、通信費一〇  
〇〇円(不定期)を払った人を会員として登録  
して、「AKIHIKO忌」などの案内や会報  
をお送りしています。この二年間ほど通信費  
を払っていない人で、引き続き案内等の必要  
な方は通信費(切手可)をお送りください。

6 通信費の送金先は左記の通りです  
口座番号「〇〇一七〇一六六五二二三」  
加入者名「岡村昭彦の会」



「岡村昭彦の会」会報第七号

発行 東京都江戸川区西小岩五十一―二七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL & FAX 〇三―三六五七―八三八〇